
虚界領域

アサキタツナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚界領域

【Nコード】

N6838M

【作者名】

アサキタツナ

【あらすじ】

浪人生活をしている椎名綾人は、焦りといらだちの中で、いつもの平凡な日常を過ごしていくはずだった。しかし、彼は選ばれてしまった。

国家が陰で行う謎の政策。この国にある二つの世界。現実と、そこから淘汰されたものたちが集う世界。

綾人は、巻き込まれたこの国の現実から帰ってくる事はできるのか。

浸食する現実

行き交う人の流れの中で、少年はたたずんでいた。まだ小学校低学年くらいだろうか、その顔はあどけない。電気店のショウウィンドウのテレビを、食い入るように見つめていた。見つめる先は一つだけノイズの入った画面。故障したのだろうか、そこに見えるのは砂嵐のみ。だが、少年は見入っていた。デジタルテレビに砂嵐はない、この時代には珍しいアナログテレビだからかもしれない。

しかし、そこだけ時間が止まったようだ。

少年をスケッチする手を止めて、椎名綾人はしばらく眺めていた。予備校の帰りに立ち寄った喫茶店の窓からこの光景を見た瞬間に、大学ノートにスケッチをはじめてしまった。ノイズの入った画面を一生懸命に眺める少年、という図式は綾人の絵心を刺激した。浪人生という呪縛から逃れるためにはじめた絵だが、すでに生活の一部と化している。

二年の浪人生活の間に描いた絵は百点以上にのぼるだろう。最初のころはつたないタッチだったが、だんだん自分でも納得がいくものが描けるようになってきた。最近では、モデルにするものまで選り好むようになってきている。

これではいけない。今年も大学に入らないというのは許されないだろう。もっと勉強しなくてはと思う。今年は絶対にどこかの大学に入れ。親にきつく言われている。もとよりその条件で二浪をはじめたのだから仕方がないかもしれない。しかしここまできて手輕な私立には入りたくなかった。難関の国立に手が届きそうなのに。

もう二月になろうとしている。焦りと諦めが交錯する。そんな時に見たこの光景は、綾人の琴線に見事にヒットした。

描写を再開する。少年はまだ画面を眺めていた。綾人のいる角度からはかろうじて少年の横顔が見えた。道路を挟んでいるので車がうつとうしい。もっとよく見てみたい。顔だけを残して、ほとんど

描き上げる。注文したコーヒーを一口すすする。

落ち着いてから、最後の仕上げに取り掛かる。少年の顔をゆつくりと描写していく。だがどうしても上手く描けない。どこにでもいそうな顔だが、どうしても絵にするとずれが生じる。何かが違う。似ても似つかないという訳ではない。だが、どこか違う。

消しゴムで消して、描き直す。幾度も、幾度も。やがて自分に苛立ちが起こる。まるで最初のころのようじゃないか。最近は少し上達したと思っていたのにどういことだ。苛立ちながら、再び消しゴムで消していく。

荒々しく消しゴムを走らせて、ついうっかりコーヒーカップを倒してしまった。少し残っていた琥珀色の液体がテーブルの上にこぼれる。

ウェイトレスが慌てて駆け寄ってくる。綾人もポケットからハンカチを取り出す。

すいません、とウェイトレスに言いながら自分でもテーブルを拭くのを手伝う。拭き終えて顔を上げると、窓の外が視界に入る。

少年がこちらを見ていた。こっちのほうを見ているのではない。

綾人を見ていた。現に目が合っている。

描けない。顔を見て悟った。少年は、これまで自分が見てきた誰よりも、複雑な表情をしていた。まるでこの世に存在しないような、無機質な表情だった。

彼はじつと綾人を見つめていた。ゆっくりと口を動かす。

何かが聞こえた気がした。

「何だって？」

思わず聞き返す。まだ近くにいたウェイトレスがどうなされました、と声をかけてくる。無視をして、少年を見つづける。そして、悲しげに笑った。運送会社のトラックが信号待ちで止まり、綾人の視界を遮る。

勘定を手早く払って店を出る。

電気店の前まで走った。そこには少年はいなかった。ノイズしか

映っていないテレビが残されていた。相変わらずの砂嵐の画面を見る。少年のように。

残された砂嵐の画面を眺めてはつとする。

ワイド画面に映されたノイズの中に一瞬映像が見えたような気がした。髪の毛の長い美人と若い男が。ガラスに反射した景色だろう。そう思い振り返る。

が、辺りには誰もいなかった。

疲れているかもしれない。綾人は少し自重気味に笑って家路へと歩みを進めた。

その後ろで、ノイズだったテレビがデジタル放送を受信した。シヨウウインドウは日常になった。

歪み

「どうなんだ、今年は？」

ただでさえ息が詰まるような毎日の夕食。その食後の食卓で、父が苦々しげに綾人に訊ねる。

「センターの結果では狙っている公立は難しいんだろ」

綾人は無言でうなづく。父の言いたい事はわかっていた。これ以上浪人するなということだろう。どこでもいいから大学に入れ。きつとそう言うだろう。

センター試験の結果はすでに報告してある。芳しくない成績を。シンクで食器を洗っている母も、きつと聞き耳を立てていることだろう。綾人は先手を打つ。

「だけど可能性はあるんだ。二次試験で何とかなるかもしれないんだ」

父がタバコに火をつける。ゆっくりと煙を吐いてから、綾人を見据える。

「父さんな、ちょっと調べてみたんだ。おまえの成績だったら十分いい大学へいけるじゃないか」

そこまで言って母のほうを見る。

「あれを持ってきてくれ」

食器を洗う手を止めて、母が戸棚から分厚いA4サイズの封筒を取り出して持ってくる。種類こそ違えど、見慣れたものだった。願書だ。

テーブルの上に置かれた願書はそこそこの国立大学のものだった。両親の意図が読めた。ここを受けろということか。

「この大学を受けたらどうだ」

父が満足げに綾人に薦める。

「そうよ。あなたの狙っている大学ほどじゃないけど、ここもレベルの高い大学よ。お隣の佐藤さんとこの息子さんなんか、この大学

に行きたかったって始終言ってるらしいわよ」

お隣なんかどうでもいいだろ。心の中で一人毒づく。だが、ここまで浪人生という非生産的な生活を許してもらっていた手前、そう怒るわけにもいかない。

「試験日が重なってるよ。受けられないよ」

とりあえず、本当に受験校を変えろといっているのか確かめる。

両親が顔を見合わせる。やがて意を決したように母が口を開きかけたのを父が制止する。

「俺から言う」

そして、ゆっくりとした口調で綾人を説得するかのように話し始める。

「おまえがああ大学に入るためにがんばったのは知っている。けどな、このままだと今年も無理なんじゃないか。どうだ、目標を変えてみるというのは。これ以上浪人するのは嫌だろ？」

誰が嫌なんだ？ 主語をはっきりさせてくれ。しかし口には出さない。ただ黙って聞いていた。はっきりと自分が怒っていくのがわかった。今口を開いたら喧嘩になるのがわかりきっていた。

「ここでも十分レベルが高いじゃないか。息子がこの大学に入ったら、父さんだって自慢できるぞ。それぐらい凄いことなんだぞ」

あんたに自慢してもらうために勉強しているわけじゃあない。心の中で父親をあんた呼ばわりしている自分がいる。

「確かにおまえはよくがんばったと思う。けどもう諦めたらどうだ。つらいだろ。浪人生活は」

諦める？ つらい？ 何を言ってるんだ。

「どうだ、綾人？」

作り笑いの父の顔が憎悪を掻き立てる。

綾人は拳を握りしめ、うつむいた。目が熱くなる。怒りからか、悲しみからか、うつすらと視界がにじみ始める。

「何がわかるっていうんだ」

小声でつぶやく。

「なんだって？」

父が聞き返す。

「なにが、なにが………」

口からでる言葉を停める事はできなかった。

「何がわかるんだ！ 諦めろって軽々しく言うな！ 何で俺がつら
いってわかるんだ？ どうして、がんばったって過去形なんだよ！」
溜まっていた何かを発散するかのように怒鳴った。恐らくは親へ
の怒りではないだろう。わかっていてもどうしようもない。もう止
まらない。

「二浪してどこの大学にも入れないなんて世間体が悪いもんな。ま
してや三浪なんか絶対してほしくないよな。だから条件つけたんだ
ろ。だからこんな願書持ってきたんだろ。俺のためを思ってるふり
して自分たちが嫌なだけだろ」

父の平手が頬をはたく。鈍い音がした。痛みは感じなかった。打
たれた頬をおさえて父をにらむ。

父は悲しそうな顔をしていた。母は泣いていた。

「クソッ！」

それだけ言って、そのまま家を飛び出した。それは自分にかけて
罵声なのだろう。心の中では分かっていた。

寒かった。二月の夜空は今にも雪が降りそうな気配だった。しか
し、そんなことはどうでもよかった。綾人は公園のベンチに座って
いた。

一人になりたかった。トレーナーにジーンズだけでは今夜は寒す
ぎた。露出している手と顔の感覚がない。ただ、父にぶたれた頬だ
けが、今ごろになって熱をもって痛んだ。

親が薦める大学を受けるかどうか。それだけを考えていた。なる
べくほかのことを考えないようにしていた。さっきの自分は我なが
ら情けなかった。

きっと、薦めるままにあの大学を受けたほうがよいのだろう。も

う面倒はかけたくない。最良の選択だと思う。しかし……

そこでまた思考が振り出しに戻る。いつまでたっても同じルートをたどり、一向に答えに到着しない。

さすがに寒くなってきた。財布も何も持ってこなかったのと、りあえず近くのコンビニに行こうと立ち上がる。

人通りのない路地を歩きながら、何度と同じことを考える。相変わらず思考はループしていた。これまでに解いてきたどんな問題よりも難しかった。

「君、ちよつといいかな？」

突然横から声をかけられた。声がしたほうを見ると、スーツを着た三十代くらいのメガネをかけた、いかにもサラリーマン風な男がにこやかに笑って立っていた。隣には上司らしき四十代くらいのがたいのいい男がいた。こちらは対照的に厳しい表情をしていた。

「椎名綾人君だね？」

スマイルを絶やさずに男が言う。

「え？」

何だこの人は？ 知っている人間の顔を思い出してみるのが、該当者はいない。

「勝手に家を飛び出されたら困るよ。手間をかけるなよ。こっちにだって都合ってもんがあるからね。さて、単刀直入に言おう。君には死んでもらう」

当たり前のように、年配の男がジャケットの内側から拳銃を取り出す。綾人の思考が停止する。なんなんだ？

「やれ」

若い男のほうが急に真顔になって冷徹な声で、年上の男に命令を発する。

「わかりました」

年配の男が綾人の顔に銃口を向ける。

体が動かなかった。恐怖で身がすくむというレベルではない。指一つ動かすことができない。悲鳴をあげようにも声も上げられない。

死にたくない。逃げなければ。考えるだけでいっこうに行動に移せない。恐怖だけが増幅していく。

黒い銃口が目の前に迫る。死ぬ前に過去のことを走馬灯のようによぎるというが、綾人はひたすらに親のことを考えていた。

ごめんなさい。言いたくて言えなかった言葉を、頭の中で連呼する。

冷たい鉄の銃口が額に当てられる。

「……ん………なさ……い」

無意識に声が漏れる。銃口を向けている男がびくっとして若い男のほうを見る。

「秦野さん、どういことですか？ こいつ、ロックされているのに……」

落ち着きのない声だった。明らかに動揺していた。

「心配するな。機械が不調なだけだ。早くやれ」

秦野と呼ばれた若い男は冷静に反応している。

「なん……なんだ。た……たすけ」

ようやく動くようになった口で、綾人は必死に状況を判断しようと試みる。何でこんなところで死ななきゃならないんだ。死にたくない。せめて親に謝りたい。

年配の男は綾人の声にひどく動揺していた。

「なにをしている、早くやれ」

秦野の冷ややかな声にうなずいて、男が再び綾人の額に銃を向ける。

心臓の鼓動だけが聞こえた。頭の中に景色がフラッシュバックした。友達や親がいる風景ではなかった。今日の夕方に見た、電気店のテレビのノイズだった。

ノイズの中でドットが映像を形作ろうとしていく。幾何学的な模様。綾人は恐怖を忘れて脳裏に浮かんだヴィジョンに注意を引き付けられる。そのヴィジョンはすぐに消えて、注意が集まった所は銃を向ける男の額だった。

雪が一片降ってきた。男の額に赤い点が現れる。

「伏せろ！」

突然秦野が叫ぶ。目の前の男が銃に向けた姿勢のまま仰向けに倒れる。

状況がまったく把握できない。自分は助かったのだろうか？ 依然として体は動かない。

秦野がジャケットから携帯電話を取り出す。

「動くな！」

凜とした女性の声が綾人の背後から聞こえた。秦野は慌てて綾人の胸倉をつかみ、声のした方角に盾のように構える。綾人は相変わらず身動きが取れない。

「そこまでよ」

声はすぐ後ろで聞こえた。秦野は薄ら笑いを浮かべて、携帯電話を綾人の後ろにいるであろう人物に見せる。

「パルスロックにはC―4が仕込んである。この意味はわかるよな？」

やや間があって女性の声が反応する。

「条件は？」

「俺を逃がしてくれればそれでいい。それで起爆はしない。フェアだろ」

「私がここであなを撃ち殺すことも可能よ」

秦野が携帯のボタンを押す。

「GC―9か。いい銃だな。だが俺は撃ち殺せない」

携帯を綾人の後ろに放り投げる。

「あと十秒だ。俺を撃つかこいつを助けるか早く決めろよ。それとこいつを気にして俺を撃てなかったスナイパーにもよく狙うように言うんだな」

乱暴に綾人の体を突き飛ばし、目の前から秦野が走り去る。

「コギト！ パルスロックの位置は？」

後ろから緊迫した声。人影に反応して寝転びながらも顔を向けよ

うとしたが、いきなり腰をつかまれて左に飛ばされる。額をアスファルトにぶつける。反射的にぶつけた額に手を当てる。血が滲んでいた。

動く。そのことに気づいた瞬間に腕をつかまれ引っ張られる。

「早く離れて！ もう動けるでしょ」

腕をつかんだ人物、さっき綾人の後ろにいた女性がせかす。促されて走りながらその顔を見る。息を飲むほどの美人だった。綾人よりはやや年上だろうか、ロングヘアーの清楚な美人だが、全身黒ずくめの服装が、絶妙に似合っていない。耳にはインカムを、手には拳銃を持っていた。

「コギト。パルスロックにC―4が仕掛けられてるわ。急いで私たちをピックアップして」

インカムに指示を出して、数秒間走った後に、女性が綾人の腕を離して立ち止まりさっきまでいた地点を見る。何事かと綾人も立ち止まる。

「ブラフか」

悔しそうに女性が言う。

今なら逃げられる。身の危険を感じた綾人は、震える足を動かして反転する。後ろでカチャリと鉄の音がする。

「動かないで」

足を止めて後ろを振り返る。舞う雪の中、女性が拳銃をこちらに向けている。綾人はすでにパニック寸前だった。まったく状況が飲み込めない。突然こんな非日常の世界に放り込まれて、思考能力が格段に鈍っていた。いまや、生き延びること以外考えていない、と言っても過言ではなかった。

「た……た……たすけて」

かすれた声だった。自分の声だと思えないくらいだ。

「もちろんよ。私達はあなたを助けにきたのよ。だから逃げないで」
真摯な口調だった。しかし何か違和感がある。それが自分に向けられた銃口だと気づくのに、数秒を要した。

「な、なんで？」

ほぼ独り言のように口から漏れる。だがその言葉は、綾人の言いたいことの全てでもあった。

「あなたは狙われている。だから逃げないで。私達を守るから」
女性が銃を下ろし、綾人の瞳を見つめる。

その顔に見覚えがあることに気づく。今日電気店でノイズの中に見た顔だった。

綾人が咄然としているのを、逃げない意思表示だと思ったのだろうか。女性はさっき綾人が襲われた場所に戻ろうとする。

この現実には綾人の理解の領域を越えていた。すでに逃げる気は失せている。目の前の光景をただ眺めていた。

ふと見ると、自分が襲われた場所の扉に、四角い銀色の箱のようなものが付いている。大きさは手の中にすっぽりと収まるサイズだ。それを発見すると同時に、そのすぐ近くにあの少年がいることに気づく。気づくと言うより、突然視界に現れたと言ったほうがいいだろう。スケッチのあの少年が、銀色の箱を指差していた。

綾人のほうを見ながら口を動かす。

今度はなんと言ったかがよくわかった。だけど、不思議なことに声は聞こえなかった。

「どういうこと？」

綾人が聞き返す。女性が立ち止まり、怪訝そうに綾人を見る。

少年の口が再び動く。

さっきと同じメッセージだった。

「え？ どういうこと？」

「あなた、誰と話をしてるの？」

心配顔で女性がこっちに向かってくる。綾人は少年を指差して言う。

「え。あ、あの子が」

指差したほうを一瞥して女性が綾人の顔を覗き込む。

「大丈夫？ ショックが大きいのはわかるけど正気を保って」

綾人はやや冷静さを取り戻して答えた。なぜ冷静になったか分からない。ひょっとしたら少年を見たせいかも知れない。

「あの子がこれ爆発するよって言ってるんです。あそこの塀に付いてる変な箱を指差して」

視線を女性の顔から塀に移すと、そこには誰もいなかった。

おかしいなと思う間も無く、見ていた地点から光が見えた。刹那、それは炎となり、爆発となった。圧力に押されて体が後ろに飛ぶ。その後の記憶は数秒とんだ。すさまじい衝撃を受けたところまでは覚えていた。

目を開けると自分の上に女性が自分をかばうように倒れていた。辺りは瓦礫と化していた。

「怪我はない？」

女性が弱々しげに聞く。頭から出血しているのが見えた。綾人はうなずいた。

「あ、え、大丈夫……ですか？」

質問に答える代わりに女性が軽く微笑み立ち上がる。そこにくすんだ白色のワゴン車がやってくる。

運転席の窓が開き若い男が顔を出して叫ぶ。

「急げ、ラグエル！ 野次馬がくるぞ」

「わかった」

女性が答える。まだ倒れている綾人の腕を引っ張り立たせる。

「早くあの車に乗って」

何も疑いはしなかった。信用できると直感した。綾人は促されるまま自分をかばってくれた女性の肩を支えて車に向かう。

「紳士的なのね」

女性が微笑む。

「助けてもらったから。当然です」

冷静に答える。そんな自分に自分で驚く。こんな状況でよく落ち着いていられるものだ。

後ろのドアを開けて女性を乗せる。綾人も乗り込んだ。躊躇はな

かった。この人についていったほうが安全に思えた。理由はそれだけではなかったかもしれない。

そして、車が静かに、速やかに発進した。

隔離世

「きみが綾人君か」

しばらく走ったところで、運転席の男が口を開いた。車が信号で止まる。男が振り向いた。

「僕はコギトだ。よろしく」

さつき少し見たただけではわからなかったが、ずいぶんとかっこいい人だ。年は綾人より少し上だろう。それにしても、コギトとは変わった名前だ。漢字でどう書くのだろうか。

「話はラグエルから聞いたかい？」

どうやらそれが綾人を助けてくれた女性の名前らしい。ニッケネームか何かだろうか。

女性がけだるそうに頭を押さえながら答える。

「まだよ。私が説明するからあなたは運転に集中して」

「そうさせてもらうよ。ただし、訂正すべきところは口出しさせてもらうよ。いいね？ それと、怪我は大丈夫？」

「どちらもOKよ」

綾人がおずおずと質問する。

「あの、これからどこへ行くんですか？ 家には帰してもらえますよね」

一呼吸してから、ラグエルが答える。

「これから行くところは隔離世というところよ」

「いきなりで悪いけど、それは違うよ」

コギトが口を挟む。

「隔離世に行くわけじゃない。これから行くところは僕たちの家だ」

「そうね。訂正するわ。あなたは隔離世の人間になったの」

意味がまったくつかめない。コギトが反論しないところを見ると、これで正しいのだろう。ラグエルが話を続ける。

「家に帰してもらえるか聞いたわよね。家には帰ろうと思えば帰れ

るけど、家族のもとへは帰れない」

「どういう、ことですか？」

ラグエルが悲しい目をする。言いにくい事を言うようだった。今日の父親の目を思い出す。

「ごめんなさい。助けることができなかった。私達が到着したときにはもう」

何を言ってるんだこの人は？ 助けられなかった？ 何から？

そう思いながらも綾人は言葉の意味がわかっていった。ただ、認識するのを拒否していた。

さっきから秦野の言葉が頭の片隅にあった。

——手間をかけるな。

「あなたたちを襲ったやつらは、暗屠と言うの」

「あんと？」

その言葉にラグエルはうなづく。

「その組織に狙われたものは、必ず抹殺される。私もコギトも、そしてあなたも抹殺された」

「ちょっと待ってくれ！ 俺はまだ生きている。あなたも」

生きていると言う言葉が胸に刺さる。無意識だが、俺を強調して言っていた。

長い間があった。ラグエルが綾人から視線をずらし、窓の外を見る。雪がうっすらと積もっている。

「私達は、世間から消去されたの。あなたも私もすでに死んだ人間よ」

「そんな馬鹿な！ 誰が死んでるんだよ？」

綾人は怒鳴った。ラグエルは虚ろな瞳で外を見る。

「認識されないと言うのは、死と同じよ。私達は世界から切り離されたの」

「どういうことだよ？」

「いずれ……」

そこまで言うと、座席にもたれて目を閉じる。

「なんなんだ、あんたら！」

綾人は叫んだ。車のガラスを力任せに叩いた。

誰も何も答えない。

もう一度怒鳴ろうとすると、運転席のコギトが口を開いた。

「これから全てを教える。君に危害は加えない。もちろん選択肢も与えるつもりだ」

冷淡な迫力のある声だった。不思議と敵意は感じられない。

その言葉を綾人は信じる事にした。理由はわからないが、これがベストだと確信できた。自分で考えた事ではないはずなのに。そしてこれ以上の追求はしなかった。できなかった。

しばらくして、車が静かに止まる。そこは高層マンションの駐車場だった。

起動

連れて行かれたのは、マンションの一室だった。部屋の中は、まるでコンピュータールームのようだ。ほぼ全ての部屋にパソコンや妙な機械が所狭しと並んでいる。だからと言って、決して部屋数が少ないわけではない。綾人がこれまで見てきたマンションの中では最上級である。

「さあ、中に入って」

コギトがやさしい口調で綾人を招き入れる。ラグエルはさつさと奥の方へ行ってしまった。

「ここが僕たちの家だ。もっとも、すぐに変わるかもしれないから家とは呼べないかもしれない。家族もいないしね」

さわやかに笑うコギト。綾人は妙に安心した。

「君を助けられて本当によかった」

本心なんだろうかと疑うことはなかった。笑顔を見ていると自然と警戒心が緩む。そのとき、一室から騒がしい少女の声が聞こえた。

「姉さん！ 帰ってきたの？」

どたどたという足音がこちらに近づいてくる。音の近くの部屋を見ると、短い悲鳴と、人の倒れる音、何かが崩れる音がして足音が消える。どうやら、こけたようだ。

「助けてー」

コギトがにこやかに微笑んで、頭をかく。

「やれやれ」

軽くため息をつき、綾人を見る。

「しょうがない、助けに行くか。ついでに僕たちの仲間を一人紹介するよ」

言われるままについていくと、部屋の中で少女が倒れていた。上には色々な物が載っている。書類やらパソコンのディスプレイやらわけのわからない機械類など、多種多様。いかにも重そうだった。

少女は恨めしそうにこちらを見ていた。綾人よりいささか若いだろう。短く切った髪がよく似合っていた。美人と言うよりかわいいと言う部類に入るだろう。綾人の見たところによると、だが。

「ついでって何よ。隔離世一の狙撃手つかまえて」

さっきの会話を聞いていたらしく、頬を膨らませる。そのしぐさが妙にかわいかった。少女が視線を綾人に移す。

「あ、そちらが椎名綾人君？」

「そうだよ」

コギトが答える。

「わ、ちよっとかっこいいじゃん」

少女は小さく呟いて、物に埋もれながらも急いで髪を手でとかし、握手の手を伸ばす。

「あたしはあずさって言います。年は十七で趣味は料理とお洗濯、それにお掃除。よろしくね」

妙なりのよさに戸惑いながらも、綾人も自己紹介をする。

「俺は椎名綾人です。年齢は二十歳。趣味は、スケッチかな」

言いながら握手をする。となりでコギトが咳払いをする。

「訂正しておきます。彼女の年齢は十八。趣味は射撃とテレビゲームです」

「ちよっとー。べつに一歳ぐらいいいじゃない。それに趣味は昨日から変わったの」

あずさがまた膨れっ面をする。

「わかりました。それじゃあ今日の料理当番はあなたですんで、期待しますよ」

「えー。だって今日の当番姉さんだよ」

「彼女は今日よく働いたから、君が代わりにやるの。いいね？」

あずさが顔を青くする。

「姉さん大丈夫なの？ ひどいの？ 怪我」

その言葉に、自分を守ってくれたラグエルがフラッシュバックする。頭から出血していたが、大丈夫なのだろうか。もし、彼女

がかばってくれなかったら、自分はようになっていたのだろう。

「少し休めば大丈夫だと思うよ。ここまで普通に歩いてきてたし」

「よかったー」

安堵の声を上げるあずさ。綾人も内心胸をなでおろす。

「ということで、今日の料理当番は君だから」

「コギトはー？」

さっきまでとうって変わって真剣な表情をしながら、コギトが言う。

「僕はこれから綾人君に説明しなくてはいけない。いったいどうなっているのかを」

「そっか」

あずさがすぐに引き下がる。ことの重大性を感じたのだろうか。

これからされるであろう説明に対する不安が大きくなる。要素の一つはわかっている。両親だった。

「それじゃあ早くしたほうがいいよ。綾人君もわけがわからなくて不安だと思うよ」

「そうだね」

二人の視線が綾人に注がれる。目を背けたい気分だ。

「だから、今日の料理は頼んだよ。おいしいの期待してるよ」

「まかしといて」

あずさが声を張り上げる。そして、思い出したようにつけ加える。

「あのさ、姉さんの様子見に行っている？」

首をかしげながらコギトが壁にある時計を見る。

「そうだねえ。今はまだ休んでると思うから、一、二時間経ったら行っていると思うよ」

「わかった」

「じゃあ、僕たちはこれで失礼するよ」

「うん。それじゃあ、綾人君また後で」

あずさがこちらに手を振る。

「あの、すいませんけど」

綾人が口を開く。これだけは言っておかなくてはと思った。

「助けなくていいんですか？」

あずさの上のいろいろなものを指差す。一瞬の沈黙の後、

「あ」

という声が見事にハモツた。

その後、二人であずさの発掘作業をした。彼女はの間ずっと顔を赤くしていた。シリアスに話した後にこれでは、確かに決まらない。

綾人はこざっぱりとした部屋に連れて行かれた。テーブルと椅子が四脚。ファイルが並べられた本棚。そして、壁にかけられたホワイトボード。家具類はこれぐらいである。さっきまで見てきた部屋とは天と地ほどの差がある。一般的に言えば、ここがきれいなのではなく、ほかが汚いだけだろう。

向かい合ってテーブルに座る。いつのまにか持ってきたノートパソコンをコギトがテーブルに置いて起動する。

「これから話すことは、真実だ。疑いたくなるだろうが、信じたほうが身のためだ」

その顔色は、今までの温和なものではなかった。

「まずは現実を確認してもらう」

そう言って、パソコンを操作する。

「これはさっきのニュース番組を録画したものだ」

ディスプレイを綾人のほうに向ける。よく知っている番組だった。オープニングが終わり、トピックスが流れる。

一番初めに目に飛び込んできたもの。それが認識させたい現実だった。綾人も薄々わかっていた。

『閑静な住宅街で怒った惨殺事件』

父親、母親、そして自分の顔写真が画面に出る。ディスプレイの中のリポーターがしゃべる。

「大変痛ましい事件です。なぜこの二人が殺されたのか。長男の綾人さんがどこへ行ったかも不明です。犯人は刃物で椎名さん夫妻を

めった刺しにしているところから、怨恨の線で捜査すると同時に、長男の行方を探しています」

それ以上は聞こえなかった。これが作り物だと疑う余地もあったが、そうはしなかった。拒否反応を示さない自分に驚くとともに、視界がかすんできた。

涙が一滴頬をつたう。

現実感が伴わない両親の死。リアルに感じなくても信じているから綾人は泣いた。なぜ理解できるかわからない。自分でもどうかしっている。

「つらいだろうがわかってくれ」

痛いほどよくわかっている。だが言葉にできなかった。代わりに涙をぬぐった。

「君は隔離世の住人になったんだ。これからそれが何を意味するか教えよう」

再びコギトがパソコンを操作する。

古い日付の新聞が表示される。約五年前の有名な事件の記事だ。

「これは小山千春という女の子が行方不明になったときの記事だ。神隠しや北朝鮮の仕業だと噂されて、一時期有名になった。さて、君に見てほしいのはこの顔写真だ」

そう言って顔写真の部分を拡大する。見たことがあるような気がする。有名な事件だから覚えていたのだろうか。いくらなんでもそれはないかと思ひ直す。

「この子は暗屠に狙われた。今も狙われている」

その言葉にやっと気づいた。この子は今も生きている。だとすれば、

「ラグエルさんですか？」

確信はあった。似ている。

「そう。これはラグエルの昔の写真だ。ディスクコードされる前の「ディスクコード？」

「抹消されることだ。我々も、君もされた。では、順を追って話を

う」

コギトが黒いタバコのパッケージを取り出す。

「吸ってもいいかな？」

「ええ」

一本くわえてジッポで火をつける。机の上にある灰皿を手元に引き寄せ、煙を吐き出す。綾人にも勧めてきたが断った。

「管理システムというものがこの世に存在する。暗屠はそのシステムの一端末だ。理由や意味はわからないが、そういうものがこの世にある。我々も名前だけで実態は知らない。しかし、暗屠の目的はわかっている。個人の抹消だ。それがデイスコードと呼ばれる」

そこまで言うのと、もう一度煙を吐き出す。

「デイスコード対象者は人知れず抹殺される。誰も疑わない。国家も警察も。そして誰も管理システムの正体はわからない。おそらくもしわかったら、デイスコードされる。そういうものらしい」

「だったら、ラグエルさんが公の場に出れば。何百人の人に確認してもらえば。そうすれば、みんな認める。いくらなんでもそんなに大勢殺さないでしょう？」

コギトが静かに首を横に振り、タバコを灰皿でもみ消す。

「無理だな。そんなことをしてもラグエルが狂人呼ばわりされるだけだ。情報を操作してね。それぐらい簡単にやってのけるよ」

「嘘だ」

「嘘じゃない。そのシステムは、国家の中枢にある。この意味がわかるかい？」

目の前が暗くなる。国家の中枢にある管理システム。その意味するところ。つまりデイスコードされた者たちは、

「俺たちは、国に抹殺された」

驚愕して声を漏らす綾人。目をそらすコギト。

「そういうことになる」

「なぜ？」

「わからない。管理システムがどこの管轄で、政治家のうちどれだ

けのものが知っているのか、それも今もって不明だ」

重い沈黙が流れた。綾人は必死に話を否定しようとする。それも、今となつては無理なことだった。さっき自分が体験したことは、明らかに現実だ。

コギトが二本目のタバコに火をつける。煙が蛇のように宙に舞う。

「約束してくれないか。これからは僕たちと行動をともにすると」仲間になれということか。どの道それしか選択肢はない。

なぜかためらいはなかった。

「わかりました」

ゆっくりと答えた。その一言が自分のこれからの一生を左右することは、容易に想像できた。

コギトが静かに頷いた。

「しかし君は冷静だね。取り乱したりしないし、なによりこの状況を簡単に理解した」

それは自分でも不思議に思う。だが、今の綾人には涙を流す事が最優先された。両親の死の悲しみを緩和させるために。

再び泣き始めた綾人を見て、コギトが席を立とうとする。

「ありがとう。僕はこれで失礼する。隣の部屋にでも行って休んでいてくれ。落ち着いたら、声をかけてほしい。もっと詳しく説明する」

コギトが部屋から出て、綾人一人になる。

やがて、涙が枯れて思考が回復する。

悲しみや驚きよりも、怒りが勝っていた。暗屠。秦野。その名を心に刻む。そのときに、やっと気づいた。今日電気店のテレビの中に見た顔だったと。もう一人はコギトだった。

熱帯のジャングルのような緑が生い茂っている。その空間は高い温度と湿度の中で静寂を保っていた。ジャングル特有の騒がしい動物の泣き声は一切ない。

それは、作られた場所だった。人工的に造られた自然の中で、少

年はたたずんでいた。かわいいと形容するのがぴったりの、整った女の子のような顔立ちだった。

そこに秦野が近づいていく。

「ここにいましたか」

「雪は降りでしたか？」

柔らかな物腰で秦野に訊ねる。大人びた口調。中学校を卒業したかどうかの風貌の割に、非常に穏やかな声だった。はたから見るとまるで親子のようでもある。

「ええ。吹雪いてきていますよ。それにしても、ここは暖かい」

「そうですね。それで報告は？」

「失敗しました。対象者3名のうち、息子である椎名綾人には逃げられました。先日配属された山口も殺されました」

少年はあごに手を当てて考えるしぐさをする。

「隔離世の者たちかあ」

いかにも子供っぽい口調だった。

「はい。やつらに邪魔を」

「気にすることはないですよ」

少年が微笑む。

「まだまだ許容範囲の出来事です。いや、むしろ好都合だ。しかし山口さんが殺されたのは痛いな」

秦野が眉をひそめる。

「好都合とは？」

「山口さんがいなくなるのは厳しいな」

明らかに話をはぐらかしていた。秦野もそれ以上は追求しないことにした。あえて聞くことを選ばなかった。そこに、秦野にとって好ましくない答えがある気がして。そして当り障りのない会話をする。

「ええ、山口は数少ない成功者ですからね。それで、これからどうしますか？ 神楽さん」

それが彼の名だった。神楽は手近にあるマングローブの木を見上

げる。熱帯に生息するはずのこの木が、こんな都会の真ん中で育っているとは誰も思わないだろう。

「椎名一家のデイスコードは絶対らしいですね」

「タイプGですか？」

秦野がやや慎重に言う。

「とりあえず、我々はシステムの命令を実行するだけですから、そんな名称にこだわっても何もならないと思いますよ」

相変わらずの軽い物腰だった。しかし、タイプGの抹殺だからこそ、奴らが邪魔をしてきたと考えるのが妥当。この名称に意味がある事は、秦野には重々分かっていた。しかし、神楽の言葉に従い秦野は少し笑いを漏らす。

「そうですね。それでは。次の命令をください」

「仕事熱心ですね。自分の仕事に疑問をもったことは？」

神楽がからかい口調で質問する。

「ありませんが」

秦野もそれに答えた。

静寂に包まれた自然の中、二人の男は微笑しながら向き合っていた。それこそが、管理システムの端末が起動することを意味していた。

スケープゴート

綾人はベッドの中で目を覚ました。すでに外は明るくなっている。昨夜降り積もった雪に光が反射して、普段よりも光量が多い気がする。

昨日説明をうけた後、すぐに隣の部屋のベッドで横になった。部屋にあったテレビでは、両親が殺された事件が報道されていた。いろいろなチャンネルを見てみたが、内容は似たり寄ったりだった。何度かあずさやコギトがドアをノックするのがわかったが、無視をした。

何かを考えていたうちに、眠りに入っていた。それが何だったのか、思い出せない。だが、きつと今と同じだろう。

なぜ？

答えの出ないことは考えない性質だが、思考を止めることはできなかった。そして、今朝起きて出した結論のため、綾人は部屋を出る。

詳しい説明を聞こうじゃないか。

廊下に出ると、すぐにあずさがこちらに声をかけてきた。すでに起きていたらしくセーターにジーンズというラフな格好をしている。

「おはよ、綾人君。こっち、こっち」

手招きをする。とりあえずついて行くことにすると、そこはダイニングだった。

あずさがいそがしく料理を盛っている。

「昨日綾人君起きてこなかったでしょ。だからおなか減ってると思って。残り物だけど、あたしががんばって作ったんだからね」

声が弾んでいた。君もデイスコードされたのか、と訊こう思ったが聞けなかった。時計は十時を少しまわっている。

「はい、どうぞ」

目の前に出されたものは、ほぼ原型をなしていない料理だった。

おかゆ状になったご飯は、かろうじてご飯だと認識できた。あとはわけがわからない。

「見た目は悪いけどさ、味のほうは大丈夫」

恥ずかしそうな表情を見せながらも、自身たっぷりの声だった。

確かに見た目と違って味はいいのかもしれない。そう思いながら綾人は卵が使ってあるだろう一品を口に運ぶ。

不気味な味が口に広がる。美味い不味いで判断できるレベルではなかった。しいて感想を言うのなら、体によさそうだろう。漢方薬のような味がする。

食べられないことはないが、どうしたらこんな味が出るのだろう。

「まあまあでしょ？　ね、ね？」

目を輝かせながらあずさが聞く。

「あ、うん。まあまあ、かな」

つつい嘘を言ってしまった。そこでふと疑問が浮かぶ。

「君も食べたの？」

「もちろん。だって昨日の残り物よ」

元気な笑顔であずさが答える。分からないように静かにため息をついて、再び食べ始める。気を抜くと食べられなくなりそうだ。

ニコニコとあずが見守る中、一通りすべてたいらげる。仕事を終えた達成感がわいてくる。

「ごちそうさま」

その言葉にあずさがすぐに反応する。

「おかわりもあるよ！」

防衛本能が働いて、自然と首を横に振る綾人。

「そういえばコギトさんたちは？」

すぐさま話題を切り替える。

「あの人たち起きるの遅いからなあ。でも、もうそろそろ起きてく
ると思うよ。あ、それから、名前は呼び捨てにしたほうがいいよ。
そっちのほうが能率がいいってコギトが言ってた」

そういうものか。素直に忠告を受けることにしよう。そうだ、こ

ここきて最初に疑問に思ったことがあった。

「ラグエルって、あずさの姉なの？」

単刀直入に質問をぶつける。

「違うよ。でも姉さんみたいな人。美人で優しいし。あこがれるなあ。あんな人が姉さんならいいなあと思ってね」

うっとりした表情で話すあずさ。

「そういえば、何でラグエルって言うの？」

質問を続ける。あずさも小首をかしげる。

「なんかねえ。一般社会と決別するため、とか言ってたよ。確か。それで自分で考えた名前を使ってるらしいよ。要するに気分転換なんじゃない」

そんな簡単な言葉で片付けていいのだろうか。

「あずさも自分で考えた名前なの？」

「これは親からもらった名前。前は姓も名乗ってたんだけど、もう意味ないから止めたの。もう、篠原さん家のあずさちゃんじゃないからね」

明るく振舞っていたが、どこか悲しそうだった。スケッチをして人間観察をしていくうちに、なんとなくだが分かるようになった。

「さて、ほかに聞きたいことはありますか？」

先生口調で訊ねてくるあずさ。無理して強がっているようには見えなかった。あずさの強さに殊のほか感心する。

「そうだなあ」

いろいろ聞きたいのだが、多すぎて何から聞いたらいいかわからない。

「とりあえずは、君らは何してるの？」

「それは僕が答えるよ」

いつのまにかコギトが現れて椅子に座る。

「ディスコードされた人間を助ける。それが僕たちの役割だ。ディスコードされて助かった者は僕の知るところでは約二十人。全体の一割にも満たない。君は非常に幸運だったんだよ、綾人君」

「綾人でいいですよ。そうするのがここの決まりなんでしょ」

「順応性が高いね」

コギトがにやりと笑う。

「あ、姉さん！」

あずさが突然大声を出す。声の向けられたほうを見ると、ラグエルが立っていた。

「あずさ。コーヒーをいれてくれない？」

普段着に着替えてはいるが、まだ半分寝ているような感じだ。低血圧なんだろうか。

「まったく。朝は弱いんだから」

小言をつぶやきながら楽しそうにキッチンへ向かうあずさ。ラグエルはそのまま席についた。

「あ、どうぞ。話、続けて」

言われてコギトが再び話し始める。

「どこまで言ったかな？ ええと、僕らの活動内容だったね」
うなづく綾人。

「さっき言ったように、デイスコード対象者を助けるのが僕らの仕事だ。そしてもう一つ。暗屠を壊滅させることだ」

コギトが鋭い表情になる。

「対象者を管理システムのコンピューターに侵入して見つける。そして、対象者をマークして暗屠が現れるのを待つ。暗屠を殺し対象者を助ける。これが活動の全てだと言ってもいい」

「成功率低いけどね。タイプGの生存者は君だけだし」

横からラグエルが茶々を入れる。

「まあね。確率論的に言えばね」

コギトも苦笑して答える。

「あの、タイプGってなんですか？」

控えめに質問する。

「デイスコードタイプのことだよ。タイプAは対象者を誘拐して殺す方法だ。タイプDは事故を起こさせて殺す方法。タイプMはてみ

じかに対象者を殺す。方法は問わず。そしてタイプGというのは、家族全員を殺すことだ。君ら家族全員が、デイスコード対象者だったんだ」

家族、という言葉に心が反応する。無表情を装ってはいるが、頭の中では親の顔が脳裏を横切り泣きそうになる。

「君には選択肢が二つある。ここに残って我々とともに戦うか。それとも、この状態で普通に生活していくか」

何を言ってるんだ。

「こんな状態で普通に生活できるわけじゃないですか」

あたりまえの事を口にする。状況は完全とはいえないまでも、把握しているつもりだ。

「助けた者の中には争いを好まない者もいる。そういう人たちが集まって暮らしているところがある。口の悪いやつは彼らのことを最下層民なんて呼んでいるけどね」

「あんたでしょ」

すばやく鋭い突っ込みをいれるラグエル。そこにあずさがコーヒーを人数分持ってきた。

「味付けはあたしがやったから。もし足りなかったら入れてね」

と言いながら砂糖とクリープと、初めて見る調味料を置く。

味付けっていったい……。しかも綾人の目の前にあるコーヒーは、明らかに二人のものと違っていた。なんかどろどろしていて色もやけに深い。思わず交互に見比べてしまう。

その様子に気づいたあずさが答える。

「二人はブラックなの。綾人君もブラックがよかった？」

「あ、いや、ええっと」

少しあずさの表情が曇ったように見える。

「ブラックは飲めないからちょうどいいよ」

笑顔で明るく答えてしまう。あずさが無邪気に笑う。

「だよねえー。よくあんな苦いもの飲めるよね」

適当にあいづちをうち、自分の目の前の液体を見る。これをコー

ヒーと呼ぶことはできないだろう。あずさも椅子に座り自分の分のコーヒーを飲む。やはり綾人のものと同じ色つやをしていた。他の二人はおいしそうにコーヒーを堪能していた。自分だけが飲まないのは不自然だと思い、覚悟を決めてカップに口をつける。

そして、今まで食べた何よりも甘いゼリー状のものが口に入る。半分固体になっているんじゃないかと思うほど、どろどろしていた。もちろんコーヒーの味は微塵もしない。

あずさをちらりと見ると、おいしそうに飲んでいた。

「近いうちに返事を聞かせてほしい」

コギトが言う。

「え？」

と言ってから気が付いた。これからどうするか聞かれていたんだった。あまりに衝撃的なコーヒーに気をとられていた。

「我々と一緒に戦うか、それとも隠れて暮らすか。ほとんどの者は隠れて暮らす事を選ぶけどね」

言い回しの意味はわかった。隠れても恥ずかしい事ではないと強調したのだろう。それが当たり前と。

「ああ。はい。分かりました」

答えはすでに決まっている。

「ねえ。そういえば、あの子って誰？」

ラグエルが口を開く。幾分目が覚めたようで、もうだるそうな顔はしてなかった。

「爆発が起きる前に言ってたでしょ。」

今まで忘れていた。あの子は何であんなところにいたんだ。しかも爆発を知っていた。黙り込む綾人。

「何でパルスロックに仕掛けられたC-4が爆発するって分かったの？」

「あの子が言ったんです」

頭を整理しながらしゃべる。

「だからあの子って誰？」

その質問には答えられなかった。いったい何者なんだ。昨日あの子を見てから、全てが狂い始めた気さえする。あの少年。テレビの中のラグエルとコギト。昨夜の出来事。関連があるのだろうか。

「ちょっと聞いてくれますか？」

綾人は昨日の一連の出来事を話した。一同が静まり返る中、最初に口を開けたのはあずさだった。

「わかった！ それ綾人君の守護天使だよ。うん。きっとそうだよ」「そういう考え方は嫌いではないけど、おそらく違うわね」

ラグエルがあずさの意見を一蹴する。

「そろそろ僕は失礼するよ。キルと連絡をとらなくてはいけないから」

コギトが席を立つ。

「キルって誰ですか？」

「僕らのチームのリーダーだよ」

そう言って部屋を出る。残された者は、まだ綾人が見た少年のことを考えているようだった。結論は出そうにない。

「一つ聞いておきたいんですが？」

「なに？」

思考を中断してラグエルが答える。

綾人は鋭い視線を向ける。昔から、重大な場面に遭遇すると目つきが鋭くなる癖がある。

「僕の両親を……殺したのは、秦野たちなんですか？」

殺したという言葉の口に出すのは覚悟を要した。

間があった。ラグエルはゆっくりと頷いた。綾人の中で一つの決意が完全に固まった。恐怖よりも強い感情が先にたった。

「決めました。ここに残って戦います」

「そんなに簡単に決めていいの？ コミュニティーで生活すればここよりはるかに安全よ」

綾人の目がいつそう鋭くなる。

「秦野を、あいつを殺すまでは戦います」

沈黙が流れた。綾人がコーヒーを喉に流し込む。瞬間に気づいた。これはコーヒーじゃなかった。どろどろした液体が喉を通り、あとには焼けるような甘さが残る。あずさに失礼だと分かっているが、よく分からない悲鳴をあげて喉を押さえる。

「そのコーヒーを一気飲みできる度胸があれば大丈夫ね」

ラグエルが微笑む。

綾人も苦しいながらも笑みを作って返す。

あずさだけが不思議そうな表情で二人のやり取りを見ていた。

それは、冬に雷が鳴るほどのインパクトだった。

キルを初めて見た時の綾人の感想は、ヤクザだった。三十後半ぐらいの男で、ごつい体格。スキンヘッドの頭。野太い声。そして無愛想。どこからどう見ても立派なヤクザだ。しかも幹部クラスの。

戦うことを決めたその日の夜に、彼はやってきた。これからの予定をコギトたちと決めていると、音もなくすっと部屋に現れた。人が来た気配やドアの音もなかった。綾人はもちろん、キルを知っているはずのコギトたちまでもが驚いていた。あずさなんかは悲鳴を上げて今にも泣き出しそうだった。

それもそうだ。いかにも悪人面だ。こんなおっさんが部屋に現れたら、たとえ知り合いでも女、子供は泣くぞ。登場の仕方に綾人は半ばあきれていた。

そんな状況を意にも介さず、

「シューティングレンジへ行く」

と一言だけ言って、キルは綾人を連れ出した。ラグエルも慌ててついていった。

そういうわけで、綾人は今銃を撃っている。

銃をたくさん見ることも初めての体験だし、ましてや自分が撃つことになるのは夢にも思わなかった。しかもこんな場所です。

シューティングレンジと言っても、ちゃんとした射撃場ではなく、使われなくなった地下ボウリング場だった。レーンの先にはピンの

代わりにマネキンが立っていた。

「右手でトリガーに指をかけて、左手でしっかりと固定する。グリップがしっくりこないようなら、色々な銃を試して一番自分にあったものを選んで」

なぜか教えるのはラグエルで、キルはというと後ろのほうで腕組みをして、黙ってこっちを見ている。存在感だけはすごい。

5、6丁の銃を試し撃ちする。何で本物の銃があるんですかと聞きたかったが、後ろが怖くて質問しにくい。

銃を撃つのは爽快だった。的に命中したときが最高に気持ちいい。何もかも忘れてひたすら撃った。撃った後の硝煙の匂いも好きだった。

「なかなか筋がいいようね」

ラグエルが満足げに言う。

「これが一番しっくりきますね」

撃ち終わった銃をラグエルに見せる。さっき撃った銃の中では一番サイズが小さい。黒光りする銃身にはP―88と彫ってあった。

「ワルサーP―88か。なかなかいいのに目つけたわね。もう一度撃ってみて。今度はあっちのマネキンを狙って」

指差したほうを見ると、変な頭のマネキンがいた。

「あの頭はボウリングの玉になってるの。あれを狙って」

言われた通りに狙いをつける。そして引き金を絞る。短い爆発音、軽い反動とともに次の弾が装填される。二発目の引き金をすばやく引く。そして繰り返し返す。十二発程度撃っただろうか。弾が尽きてトリガーを引いてもカチッと鳴るだけになった。銃口から軽く煙が上がる。

銃を下ろしてのを見ようと、すでにボウリングの玉ではなくなっていた。完全に壊れて、妙な塊がマネキンの首の上に乗っている。

「すごい。全弾当たってる」

ラグエルが感嘆の声を漏らす。

「それくらいでいいだろう。帰るぞ」

後ろで黙って立っていたキルがやっと口を開く。

「その銃はもうおまえのだ。手入れの方法とかは家でラグエルにでも聞け」

それだけ言ってさっさと一人で出口へ向かう。ラグエルは慌てて銃をしまう。

「何なんですか、あの人？」

綾人があきれて言う。

「無愛想だけど、仲間思いのいい人よ」

そういわれてもにわかには信じがたい。高校のときにあんな感じの先輩がいたが、ずいぶんみんなから嫌われていた。どうもその人とオーバーストップする。

銃や弾薬をしまいラグエルが声をかける。

「よし。それじゃあ私たちも行きましょう。弾薬交換の方法なんかは車の中で教えてあげるわ」

キルはすでに見えなくなっていた。車のエンジンでもかけている頃だろう。ラグエルについて階段を上がり駐車場へ行く。キルは車の側で電話をしていた。

こっちを見るなり一言言って電話を切る。

「どうしたの？」

ラグエルが問いかける。

「スケープゴートが誰か分かった。今コギトがこっちに向かっている。悪いがおまえらだけで帰ってくれ。俺とコギトでそいつを捕まえる」

「そう。わかった。無理しないでね。コギトが来るまでここにいましょうか？」

「あずさの方が心配だ。大事な機材を壊されてはたまらん。早く帰れ」

無意味に横を向いて言ったキルに、ラグエルがやりと笑い車に乗り込む。

無愛想だけど根は優しいか。なるほど。綾人も感心しつつ助手席

に乗り込む。

「がんばって」

ラグエルが声をかけるとキルは鼻を鳴らして、早く行くように目で合図する。

妙に大きくエンジンをふかして、がたがた音を鳴らして車が発進する。この感覚はどこかで味わったような。綾人はふと感じる。この車のゆれは覚えがあった。そうだ。自動車学校に通い始めた頃の自分の運転だ。とすると、

「あの、運転のほう大丈夫ですか？」

「話しかけないで。気が散るから」

やけに陰しい表情で運転している。シフトチェンジの度に車体が大きくゆれて、エンスト寸前の嫌なエンジン音が響く。新聞記事では、確か十八のときにディスコードされたはずだ。ということは、免許がない可能性は大きい。

「あの、俺代わりましょうか？」

身の危険を感じて言ってみた。ラグエルは無言のまま運転を続ける。綾人に見向きもしない。何か気に障ることでも言ったのだろうか。気まづくなってそれ以上口を開かず黙っていると、車が道路わきに急停車する。

ラグエルがハンドルにもたれかかって大きく息を吐いて、綾人の方を疲れきった笑顔で見る。

「よかったー。代わってくれる。私運転どうもだめなの」

「喜んで」

心の中で綾人もほっとしていた。この人の運転には二度と乗らないと固く心に誓い、席を交代する。再び車が発進する。今度はスムーズだ。となりではラグエルがぐったりしていた。

「そういえば、さっきの会話どういう意味なんですか？」

「ああ、あれね。綾人の家族を殺した犯人役が見つかったの。それがスケープゴート。つまり身代わりよ」

「見つけてどうするんですか？」

「聞かないほうがいい」

綾人が眉をひそめる。

「どうしてですか？」

ラグエルは答えない。

「俺にも聞く権利はあるはずです。発端は俺の家族が殺された事件からなんです。いわば当事者なんですよ」

綾人は鋭く言い放った。これからは暗屠の壊滅、いや秦野を殺すことを第一に考えるのだ。そのためにはいかなる情報も知っておきたかった。

「聞かないほうがいいわよ」

「いえ、教えてください」

ラグエルはため息をついた。

「殺すのよ。そして死体が見つからないようにする」

「なんで？」

声が震えていた。聞かないほうが良かったかもしれない。思わずラグエルを見る。

「前見て」

冷静にラグエルが言う。

「彼らが犯人役に仕立て上げるのは決まって逮捕できない犯罪者なの。証拠不十分で逮捕できないものや、身代わりを用意する政治家や暴力団の幹部。そいつらに濡れ衣をかぶせる。それがシステムのやり口よ。私たちを抹殺して、同時に犯罪者を逮捕する。まったく合理的だわね。と言っても犯罪者というくくりではなく、彼らに都合な人間なのかもね」

「だからって、なにも殺さなくても」

声を荒げて反論する。

「分かってないわね。犯人が捕まったら、それで事件は終わりなの。みんな忘れる。世間もマスコミも。あなた、自分がどこにいるのか分かってないのね」

なにも言い返せなかった。自分のおかれた状況をあらためて認識

した。しばらく黙って運転する。

綾人は冷静に事態を分析しようと試みる。今ある情報から可能な限り予測を立てる。出題者の意図を考えて、国語の解答を出すときのように。その中の一つが、妙に気になった。

「俺だったら、犯人は俺にする」

ラグエルに聞こえるようにつぶやく。反応を期待して言ってみたが、予想以上に早く返ってきた。

「そうね。確かにそのほうが効率がいい。息子は実は犯人で、発見したときには自殺していた」

何かを思案するラグエル。綾人は思いついたことを言ってみる。

「こうやって犯人役を殺すことは初めてではないですよね。やつらがそれを見越しているとするれば」

「罠、っていうこと？」

「ええ」

急いで携帯電話を取り出すラグエル。すばやい操作でメモリを呼び出してコールする。

「私よ。気をつけて。その情報は罠かもしれない」

そこまで言うと言表情が曇る。聞き取ることはできないが、受信音が小さく綾人にも聞こえる。

「それで、どうするの？」

再び相手の声を聞く。

「わかった。用心してね」

電話を切る。いぶかしげな表情のラグエル。

「どうしたんですか？」

「ターゲットはもう死んでいた。罠だとキルたちも気づいたわ。でも、そんなあからさまな罠をあいづらが使うなんて。何かの手違い？」

考えを進めるようにラグエルが答えていく。綾人は即座に一つの可能性に思い至った。

「あずさ」

「え？ なに？」

ラグエルが振り向く。綾人は高速ギアにいられてアクセルを踏み込む。急加速した反動が二人にかかる。

「ちょっと。なに？」

抗議の声を上げるラグエル。アクセルを踏み込みながら綾人は答える。

「戦力の分散です。一つはコギトたち、そしてもう一つはあの家で
す」

「そんなことありえないわ。あの家はばれていないはず」

せりふとは裏腹に明らかに狼狽している。ラグエルの携帯が一度だけコール音を発する。

「コギトたちが交戦をはじめた」

歯を食いしばり悔しそうにラグエルが言う。

「助けに行かなくても？」

「1回のコールのときは危険な状況ではないわ。なんといってもあの二人は強いから。それよりもあずさが心配だわ」

綾人は頷き、信号を無視して車を走らせる。一刻も早く。交通事故故なんか気にしていられなかった。

「そこでもいい。止めて」

マンションまで後少しという所で、ラグエルがストップをかける。一瞬、不信な顔をしたが、意味に気づいて綾人も頷く。つまり、侵入者に見つからないため。

車を停めると、ラグエルは隣ですでに戦闘準備をしていた。銃のマガジンをチェックしている。その銃は、グリップ部分が木目調になっており、銃身はブラック他はシルバーの見事なツートンカラーになっていた。綾人の銃よりは大きいが、こちらのほうがスツキリとしている。

次にさっき綾人が選んだ銃を点検して渡す。

「OK。後は引き金を引くだけよ。絶対にためらわないこと。死ぬわよ。あいつらを人と思ってはダメ。レンジでの練習を思い出しな

さい。あいつらはマネキンと一緒に」

じっと綾人の目を見据えて言う。

「わかってます」

綾人は自分の銃を見ながら答えた。さっきは考えもしなかったが、これはまぎれもなく人殺しの道具だと実感する。

「私のGC―9よりあなたのP―88の方が装弾数が多い。だから、威嚇射撃は任せるわ」

予備のマガジンを綾人に渡し、ラグエルが助手席から降りる。綾人もポケットにマガジンをつっ込み急いで降りた。裏道なので、昨夜降った雪が除雪されずに残っていた。月光を反射して、いつも以上に明るかった。雪の照り返しの中、ラグエルがこちらを見つめている。

綾人が短く頷き、二人は歩き出した。

神楽

十七階にある自分たちの部屋の前に到着する。用心してここまで階段を使って小走りできたので、綾人の足は少々ガクガクしていた。一方ラグエルは平気な顔をしている。もっとも、綾人の震えは足だけではないが。

部屋はオートロックになっている。持っているキーであければいいのだが、中に侵入者がいた場合、命取りになりかねない。

「鍵を開けたら一気に踏み込む。心の準備をして」

その言葉に反応して両手を銃にかける。心音が早く脈打っているのが分かる。銃を持つ手が震えていた。

ドアの両隣に二人が張り付く。ラグエルが部屋の鍵をだす。綾人はドアを見つめる。不意にインターフォンが目に入る。液晶ディスプレイ付きで、通話者の顔が見えるタイプだ。

はっと気づいて、自分の目を疑う。目を強く閉じてもう一度見る。見間違いでも幻覚でもない。

信じられないことだが、通話中でもないのにディスプレイに映像が映っていた。それは、ありえない角度だった。インターフォンのある位置とは程遠い。

玄関のドアが内側から見えた。その前には銃を構える男が一人。しかも、あずさを人質に取っている。口にはガムテープが張られている。男の銃はこの入り口に向けられている。

なんだこれは！ 神経が参ってるんだろうか。綾人は何度も瞬きををして画面に食い入る。そうしているうちに、ラグエルが鍵穴に鍵をさして回す。すばやい動きだった。

綾人は思わずディスプレイを見る。はっきりと鍵がまわるのが見えた。これは紛れもないリアルタイムな映像。瞬時に理解して、無意識に叫ぶ。

「あずさ！　しゃがめ！」

自分が出したと思えないぐらい大きな声だった。ディスプレイの中であずさがしゃがむ。男が一瞬の動揺を見せる。ドアが開きラグエルの銃口から三度火が吹く。

すぐ隣でも、やはりディスプレイの中と同じ事が起きていた。

画面にノイズが走り文字が浮かぶ。

オクニフタリイル。アズサノミギノヘヤニモヒトリ。

疑うことはなかった。綾人はその言葉をトランスレートしてラグエルに伝える。

「奥に二人います！ あずさの右の部屋にも一人！」

部屋の中から同じ種類の銃声が数発聞こえる。ラグエルのGC―9の。

綾人は画面を見続ける。すーっと暗くなり何も映らなくなる。部屋の中からはなにも聞こえてこない。

「終わったわ。来て」

ラグエルが綾人を呼ぶ。部屋の中に入ると、血を流し倒れている男たちの中で、ラグエルが立っている。そして、GC―9の銃口をこちらに向けていた。

「どうして分かったの？ 部屋の中の様子が」

あずさがガムテープを貼られた口でラグエルに何かを訴える。

「いったい何者？ あなたも共犯者？」

あずさを無視してラグエルが冷徹な口調で質問を重ねる。

「え、あ、インターフォンに映った映像を言っただけです」

しどろもどろに答える。もちろんそんな機能がないことは分かっていた。だが、そう答えることしかできなかった。

ウ……………ロ

頭の中で声がかすれて響く。あの少年の声だった。理由はなかった。直感で感じる。危険だと。

後ろを振り向き銃を構える。

「動かな……………」

ラグエルの警告が途中で止まる。綾人の銃の先にいる者を見て。

ずいぶんと若い少年がタバコを吸いながら立っていた。中学生くらいだろうか。だが、決して隣人などではない。見定めような目つきで綾人たちを見ていた。とても子供の目つきではない。

銃を向けられても悠然とタバコを吸っている。

ラグエルも照準を綾人から少年へずらす。少年がゆっくりと煙を吐きラグエルを見る。

「君のGC―9は弾切れだ。そして、綾人君が撃つより早く私は撃てるよ」

少年がにこりと笑う。背筋が凍りつく。

――敵だ！

綾人は指に力をこめる。トリガーをあと少し引くだけで、弾丸が発射する。少年は銃など持っていない。左手でタバコを持っているだけだ。右手も見えている。少年より早く撃てる確信はあった。

「あなたは誰なの？」

ラグエルが問いかける。

「神楽」

少年が笑みを浮かべて答える。

「暗屠の一員」

その言葉に反応して綾人はトリガーに力を込めた。銃口から弾丸が発射される、はずだった。実際はなにも起きない。トリガーが引けなかった。指が、体が動かなかった。こんな感覚をつい最近味わったことがある。秦野に襲われた日に。

「今日は見学に来ただけ。戦う気はない」

神楽が携帯灰皿を出してタバコを消す。綾人は無理やりにトリガーを引く指に力をこめる。腕全体が小刻みに震えるだけで、指は動かない。

「さすがだね。まだ動けるのか。後ろの二人は完全にロックしてるね」

再び見定めるような目つきで三人を見る。

「それじゃあ、この辺で失礼させてもらうよ。いずれまた」

そう言い残し走り去る。同時に綾人の戒めが解ける。走り去った方を見るが、もういない。階段を使い追いかけようとしたところにラグエルの制止の声がかかる。

「逃げるのが先よ。必要なものを車に積んで。さっきの話も車の中でするわ」

綾人は追うのを諦め、死体の散乱する部屋の中へと引き返した。正直、やつを追うのが半分怖くもあった。途切れがちな少年の声が頭の中で響いたとき、確かにこれまでに感じたことのない身の危険を感じた。

「神楽」

綾人はポツリとつぶやいた。

スモークガラスの漆黒のベンツに神楽が近づいていく。後部座席のウィンドウが開き、老人が顔を見せる。枝のように細い弱々しい体に似つかわしくない眼光は放っていた。

「どうだった？」

神楽と目を合わせずに前を向いたまま老人が尋ねる。

「本物です」

「そうか」

老人は思案するように目を閉じる。深く刻まれたしわがかすかに動く。神楽はタバコのパッケージを取り出し、一本啜える。

「体に悪いぞ」

目を閉じたまま老人が忠告する。火をつけて、煙を吐き出し神楽が答える。

「よくはありませんね」

そのまま一本が灰になるまで静寂が続く。携帯灰皿を神楽が取り出した時、老人が再び目を開ける。

「始末しろ。隔離世の者もだ」

神楽が目細める。

「いいんですか？ デバッグするチャンスですよ」

「構わん」

決意の表れた力強い声だった。

「やつだけでは何もできまい。問題はやつの声を聞く者だ。電視者は抹殺する」

「根本的な解決になっていませんよ」

くすりと笑う神楽。

「いつまで亡霊に振り回されているんですか？　いつから保守的になったのです？」

「おまえには関係ないことだ」

老人が険しい表情で神楽をにらむ。

「おまえは命令どおりに実行すればいいだけだ。我々に干渉するな」
「あなたこそ我々の仕事を勘違いしていませんか」

「どういうことだ？」

「暗屠をシステムの端末としてしか見ていないと、痛い目にあいま
すよ」

「だからどういうことだ？」

老人が声を荒げる。

「システムは一人歩きを始めている。まさか気付いていない訳ではないはずです。本来の目的から逸脱している。これ以上暴走を止めることができれば、暗屠はシステムから離脱します」

「おまえ一人でそんなことができるわけないだろ。それにシステムは一人歩きなどしてはいない。おまえのような奴にシステムの意味は分からんだろ」

老人はあざ笑う。

「忘れたんですか？　私はあなたとは違う意味でただの成功者じゃない」

神楽も微笑む。

「脅しか？　まあ、よかろう。伝えておいてやる」

ウィンドウがゆっくりと閉じる。神楽は二本目のタバコを取り出す。車がゆっくりと走り出した。

「誰にだよ」

神楽はそう呟きながら、煙を吐き出した。

パルスロック

「そこを左に曲がって」

ラグエルがナビをして、綾人は次の目的地へと運転していた。さっきまでいた部屋の光景が脳裏に焼きついて離れない。しかし、死体を見た反応としては比較的落ち着いたものだろうと思う。機材やデーターを運ぶときも、死体から目を離したただけで特に取り乱した行動はしなかった。映画やテレビと大差がないな、と思ったぐらいだ。よくよく考えてみると、そんな自分が一番嫌だ。壊れているかもしれない。

話をすると言った割には、ラグエルは終始無言だった。

「その家よ」

ラグエルに言われた通りに家の隣に車を停める。

「あずさ。着いたよ」

優しくラグエルが声をかける。さっきのショックで少し放心気味だ。綾人よりも取り乱していた。

あの場で、荷物運びを手伝う自分と、へたり込んで泣くあずさのどちらが正常な反応だったんだろうか。出したくない結論だ。だんだんと自分が社会から切り離されていく気さえする。

家には電気が灯っていた。連絡どおりならキルたちが先に着いているはずだ。あずさを支えながらラグエルが玄関に向かう。綾人も荷物をつんだダンボールを一つ持って向かう。

玄関が開きコギトが心配顔で迎える。

「大丈夫だったかい？」

「ええ。そっちこそ無事でよかったわ。でもあずさにはショックが大きかったみたい。少し休ませたいの。寝室はどこ？」

「突き当たりの右の部屋だ」

ラグエルは部屋へと向かっていく。コギトがこちらに気づいて微笑みかける。

「大変だったね。大丈夫かい？ 君はまだ慣れてないかもしれないが、きちんとできるようになれば大変な戦力になる。戦うと決めたからには避けて通れない事だ」

もったもな事だった。しかし、コギトが言うように自分は戦力になるのだろうか。それにしても、何かが引つかかる言い方だ。微妙に論点がずれているような。何ができるようになればなのだろうか。

「荷物運ぶの手伝おう」

考えようと思ったが、コギトの申し出で思考が中断される。

「じゃあ、車の中にまだあるのでお願いします」

「わかった」

と言ってコギトが車に向かう。綾人は一つ玄関においてまた車に引き返す。十数回これを繰り返して、玄関が荷物で埋まった頃にキルが顔を出す。

「こっちに来い。話がある」

いつもの無愛想な顔だった。おかげで表情からは喜怒哀楽が読み取れない。いつのまにか後ろにいたコギトが綾人を促す。

「荷物も全部片付いたことだし、行こうか」

さっさと部屋に向かっていく。綾人も後をついていった。四人がけのテーブルに、予想通りラグエルとキルが先に席に着いていた。綾人も席に着く。

「さっきラグエルから聞いたぞ。部屋の様子がわかったんだってな」
キルが珍しく率先して口を開く。無口な人だと思っていた。

「その話は後でいいです。君たちは神楽に会ったんですよね？」

コギトが質問を変える。キルは不服そうな顔をしたがすぐに黙った。

「ええ」

ラグエルが頭を押さえながら続ける。

「まるでパルスロックにあったみたい体に動かなかった。しかも三人同時に。ありえない。そんなこと」

最後の方はほとんど眩きだった。

「あの、前々から聞こうと思ってたんですけど、パルスロックって何ですか？」

綾人が控えめに質問する。

「ああ、まだ言っていなかったか」

コギトが説明していく。

「パルスロックというのは、人間のニューロンを阻害する働きをする電波を出す装置のことだ。要するに神経細胞の動きを止めて、金縛り状態にさせる。これくらいの機械だよ。見た目はこれくらいの箱だ」

と言って指でこぶし台の大きさの四角を描く。

「あ！」

すぐに思い当たった。秦野に襲われたときにおきた金縛り。その後の爆発物。

「そう。その通り。君が秦野に会ったとき仕掛けられたものだ。そしてそれは固有の相手にしか効かない。あれは君用のパルスロックだったわけだ。その人固有の電気信号を使わなければ効果がない。人間の体が微弱な電気で動いているのは知っているね？」

綾人が頷く。

「それを阻害して動きを止めるわけだが、この電波は大変弱く干渉を受けやすい。似た波長の電波の中では作用しない。つまり、一台以上同時に使うことができない」

ここまできて、やっとラグエル表情の意味が分かった。やつはありえないことをしていた。しかも、その正体がわからなければ、こちらは圧倒的不利な状況に陥ることになる。

「さて、そこで問題だ。やつらはどうやって君の電気信号を知った？」

思わず絶句する。得体の知れない不安。喉が渴いていく感じがした。

「知っていたのさ。君が生まれたときから。やつらは二十五年前から、生まれた子供のパーソナルデータを採っていたんだ。だから、

二十五歳より上のものにはパルスロックができない」

キルが足を机に乗せて鼻を鳴らす。

「早く結論を言ってやれ」

催促されてコギトが困った顔をキルに向ける。

「いいですか。経過というのは大事なんですよ。いきなり結論に至っても意味がない。過程を経ていくことによって、幾つもの仮定を一つずつ潰す事を体験する。これは不可能の中から可能を選び出す役に立つ。不可能を可能にするわけではないですよ。この考え方を常にしていくことで、危険の中に身をおいても生存率を低下させないですむ」

「そんなことはどうでもいいから、何か知っているのなら早く教えて」

横からラグエルが口を挟む。

「言っただろ。不可能の中から可能を選び出せと」

「どうということ？」

ラグエルは眉をひそめる。

「そいつがパルスロックを使えた可能性はゼロに等しい。だったら使っていない」

「じゃあ、どうやって？」

黒いタバコのパッケージを取り出すコギト。綾人に勧めたものと同じだ。よく見るとドクロの絵が描かれている。

「パルスロック以外の方法さ」

不敵に笑うコギト。

「だからなんなの？」

「神楽はそういう能力者だ」

煙を吐き出しながら答える。その言葉を聞いたとたん、綾人の頭の中で何かが騒いだ。

「あの装置は、神楽の能力を模して作られたものだ。いわば、やつがオリジナルの装置だ」

コギトがそこで間を作る。誰も何も言わなかった。最初に口を開

けたのはキルだった。

「俺から話そう。こいつは回りくどくていかん」

キルに見られ、コギトが手のひらでどうぞと合図をする。

「暗屠には二種類の人間がいる。成功者と一般の者だ」

「そんなこと初耳よ」

抗議の声をラグエルが上げるが、キルは無視して話を続ける。

「一般者とはそのままの意味だ。訓練を受けてはいるが我々として変わらない。我々よりも戦闘能力では下だ、少なくとも今まで会った奴はな。そして、成功者とは暗屠の育成プログラムをインストールできたものだ」

育成プログラムという言葉に、妙に綾人は胸騒ぎを覚える。いや、脳が微かにだが直接反応したような感じだ。

「インストールの方法は、人の脳に直接プログラムを流し込む。ようするに、脳に電極をぶっ刺して電流を流すわけだ。当然ほとんどのが死ぬ。生き残ったものは膨大な知識と技術を得る。それが成功者だ」

「そんなこといつから知ってたの？」

「またもやラグエルを無視して話を続ける。」

「その暗屠を統括するのが神楽だ。成功者であり、特殊能力者。奴らの切り札だ。あいつが動き出したということは、本格的に俺たちを消すつもりだ」

綾人の脳裏に文字が浮かぶ。

カコマレタ

「囲まれた？」

自分の頭に浮かんだ言葉をそのまま疑問形で口に出す。

「なに？　なんだって？」

キルが過剰に反応する。綾人の目の前に顔を近づけて訊いてくる。コギトがそっとカーテンがかかっている窓の近くに行き、少し外を覗く。

「やばいぞ！　囲まれている」

コギトの声に反応してキルが舌打ちをする。そして綾人に向き直る。

「いいか。頭に浮かんだことは全部吐き出せ。ラグエルはこいつの言葉を信じて動け。俺たちがやつらをひきつける。その間におまえらは裏口から逃げろ。まっすぐ行つた駐車場に黒のランドクルーザーが停めてある。それで逃げろ。鍵はこれだ」

ポケットから鍵を取り出しラグエルに投げる。

「だから、どういうことよ？」

鍵を受け取りながら必死に説明を求めるが、キルはすでに次の行動に移っていた。やけに重いバッグを綾人に投げつける。よろけながらも受け取る。

「おまえらの武器はその中だ。早くあずさを連れて逃げろ。市民病院の駐車場で合流しよう」

「わかった。綾人、あずさを呼びに行つて。私はその間に武装しておくから」

納得がいかない顔をしながらも、ラグエルが指令を飛ばす。頷いて、奥の部屋へと走りドアを開けると、ベッドであずさがぐったりと眠っていた。両肩を揺らして呼びかける。

「あずさ！ 起きろ！ おい！」

眠そうに目をぬぐいながらあたりを見回す。

「どうしたの？」

「ここは暗屠に囲まれてる。逃げるぞ」

突然目が覚めたようで、慌ててベッドから這い出る。

「ど、どうすればいい？」

「裏口から逃げるんだ！」

ちょうどそのときラグエルが部屋の入り口にくる。

「早く。こっちよ」

「俺のP―88は？」

武器が欲しかった。綾人が言うところラグエルが投げてよこす。右手で銃を持ち左手であずさを引っ張ってラグエルについて行く。

「コギトたちは？」

あずさが後ろを見ながら心配そうに質問する。

「もう先に行った。二手に分かれて逃げるのよ」

嘘だった。綾人は何も言わない。

「あずさにも武器を渡したら」

綾人が提案する。ラグエルが立ち止まりバッグから自分と同じ銃を取り出し、あずさに手渡す。

彼女はこわごわと銃を受け取る。

「あいつらを人と思ってはだめよ」

初めて綾人が実戦にはいるときと、同じセリフを口にする。頷くあずさは震えている。彼女がまだ実戦を経験していないということに、初めて気づいた。

彼女もまた自分と同じで、人に向けて銃など撃ったことはないのだろう。

玄関から銃声が響いてくる。キルたちが戦闘を始めた。

「行くわよ」

その声に呼応して綾人がP―88のスライドを引いて弾を装填する。妙に冷静な自分に違和感を感じながらも。かちりという音とともにラグエルが裏口のドアを少し開けて外をうかがう。

「走って！」

ドアを大きく開けて走り出す三人。辺りに暗屠はいないようだった。暗い道をまっすぐに行くのと駐車場が見えた。黒のランクルを確認する。

先頭を走っていたラグエルが立ち止まり、鍵を綾人に渡す。

「車をここまで持ってきて」

「分かりました」

そう答えて車へ向かおうとしたところで、足を止める。

——少年がいた！

あの少年が。綾人をじっと見据えて。

「どうしたの？」

周りを警戒しつつもラグエルが呼びかける。

少年が口を動かす。同時に頭の中で声が響く。

クルナ。バクハツスル。ニゲロ。

「来るな？ 爆発する？ 逃げろ？」

キルの言葉を思い出すまでもなく、自然と口に出していた。

目の前にノイズが走り視界が一瞬消える。甲高い耳鳴りとともに、頭が少し痛む。短くうめき声を上げて目を閉じる。目を開けると、視界が異様に明るくなっていた。そして、文字が浮かぶ。

ランクルノシタニC―4

それは以前パルスロックに仕掛けられたプラスチック爆弾の名前だった。コギトに教えてもらった。

「逃げろ！」

二人の手を引いて走り出す綾人。後ろでけたたましい爆音が発生するとともに爆風が押し寄せる。

吹き飛ばされながらも体勢を立て直し駐車場を見る。見事に地面がえぐれていて、数台の車が炎上している。ラグエルもすでに体制を立て直していた。あずさは倒れたままだ。

「何で分かったの？」

辺りを警戒しながら訊ねるラグエル。

「文字が浮かんだん……」

言いかけたところで、視界の左側に赤く印が現れた。

ポイントされている場所に文字――ハタノ

そう表示されていた。

暗い地点だったが、綾人の目にははっきりと銃を構える人影が見えた。

自分の両親を殺した男。綾人の中で何かが切れた。思うより早く銃を構え、頭に狙いをつけて撃った。

「秦野おー！」

叫びながら連射する。甲高い発射音が叫びとともに響く。

「どうしたの！ 落ち着いて！」

ラグエルに制止の声を叫ばれて、視界から人影が消えていることにやっと気づく。肩で息をしながら銃を下ろす。

「あいつがいた。秦野が」

「は？」

「追いましょう！ あれだけ撃ったんだ。傷を負っているはずだ。そんなに遠くには行っていない！」

「なに言ってるの！ 早く逃げるのよ！」

不毛な言い合いをしているうちに、後ろからあずさの悲鳴が聞こえた。

振り返ると、血だらけの秦野があずさに銃を突きつけていた。

「見えていたとは。まさか本当に本物がいるとは思わなかったよ。あそこで確実に殺しておくべきだった」

弱々しい声で薄笑いを浮かべる。相当量の出血だった。スーツが血で赤く染まっている。

「さて、ここで取引だ。こいつを見殺しにするか、みんなで心中するか。どっちがいい？」

左手に持っている起爆装置のようなものをこちらに見せる。

「わかったわ！ 見逃すからあずさを離して！」

懇願するラグエル。

「理解力がないな。二つに一つだ」

血だらけの歯を見せてにやりと笑い、綾人に視線を向ける。

「そうだ、新しい選択肢として電視者、おまえが身代わりになるかあ？」

そう言って押し殺した笑いをあげる。

綾人は銃のグリップを握り締めた。どうすれば。最善の方法を考えようとしても、何も思いつかない。あの時素直に逃げていれば。

秦野を撃たなければ。後悔だけが押し寄せる。

神楽のようにあいつの動きを止めることができれば。

あいつの動きを止めたい。

できるならば……

ロック タイショウヲ センタクシテクダサイ
文字が浮かんだ。願望などではない。確かにそう浮かんだ。

「秦野だ。秦野を」

素直につぶやく綾人。まるで当たり前のように。

「俺がどうした？ 電視者」

君の悪い笑みを浮かべる。

タイショウシャ↓ハタノ

OK？

綾人は叫ぶ。

「そうだ！ 早くあいつの動きを止めろ！」

カンイロックーキドウ

コジンジョウホウーロードチュウ

システムーOK

データーOK

コードニンシキーOK

ロードーカンリョウ

ロック………………………コンプリート

カドウジカンハ ロクジュウビョウデス

綾人は確信した。秦野は動けない。理由はないが絶対にそうだと
思った。

銃を構える。まだ弾は残っている。

「どうした？ あずさを撃ってみろよ。無理だろ」

秦野の額に汗が吹き出る。見開いた瞳はまばたき一つない。綾人
は近づいていく。

ラグエルはあっけにとられている。

「秦野。よくも父さんと母さんを。殺してやる！」

距離が縮まる。秦野は表情一つ変えないが、異様に汗が噴出して
いた。

憎しみを込めた銃口を秦野の額に当てる。あずさの方を見る。
「あっちに行ってくれ」

怯えた表情で、あずさは言われたとおりに秦野から離れて、ラグエルの元へ向かっていく。

「まさか！ パルスロック？」

後ろでラグエルが驚きの声を上げる。

「いったい何人の人間を殺してきたんだ？ おまえらは何者なんだ？」

トリガーに指をかける。秦野の持っている起爆装置と銃を取り上げる。

「捕まえていろいろ話を聞きたいが、おまえだけは許さない！ 殺してやる」

アト ジュウビヨウデス

人を殺すことにためらいはなかった。憎しみが綾人の体を突き動かす。

「死ね！」

指に力をこめた瞬間に、それは起こった。秦野の姿が忽然と視界から消える。いや、それどころか視界が一瞬で白く染まった。一瞬の中途の後撃った弾丸が甲高い音を立てアスファルトにめり込む。視界を取り戻した時、そこに秦野の姿はなかった。

「クソッ！ どこだ？ 出て来い！」

周囲を見渡しながらわめきたてる綾人。

まだぼやけた視界の中で、秦野を探す。

「やつはどこだ！ 答えろ！」

自分の頭の中に問いかける。返事はない。それどころか、視界が暗くなっていき完全に夜の景色になる。さっきまでの薄明かりは消失した。

全員が呆然としていた。やがてラグエルが口を開く。

「綾人！ 行くわよ！ ここにいたら危険だわ」

厳しい声で呼びかける。あずさが心配そうに見ていた。

「でも！」

「さっきのは目くらましのグレネードよ。まだ的の増援がいるの！」

いいから、来なさい！ あずさを危険にさらす気？」

それを言われては仕方ない。しぶしぶながらもついていくことにする。

「これからどこに行くんですか？」

二人の元へ戻りながら、訊ねる。

「近くの仲間のところよ。そこで体勢を立て直してキルたちと合流する。それよりもあなたに聞きたいことがあるわ」

「歩きながら話しましょう」

綾人は精一杯笑顔を作る。秦野を逃がした悔しさだけが残った。少し眩暈がする。

車の後部座席に、血だらけの秦野が横たわっていた。

「あんたが……助けてくれた……のか？」

切れ切れの息で何とか話す。

「そうだ」

助手席からは、威圧感のある老人の声が返ってきた。

「神楽さんかと……思った……けどな。まさか……あんた………
だとは」

「あいつはもう暗屠の人間ではない。我らの敵だ」

「な！ どういうことだ？」

秦野が上体を起こす。

「暗屠の指揮権は私に移った。これからは私の命令に従ってもらおう」
「神楽さんは……どうなったんだ？」

老人は押し黙ったままだ。これ以上は聞けないと思い、秦野は再び横になる。

「これから言うことは独り言だ」

断ってから老人は話を続ける。

「神楽によって暗屠の成功者はほぼ殺された。奴は暗屠を潰す気だ。椎名綾人も本物の電視者だということが分かった。神楽は私が始末する。椎名綾人は秦野に任せる。場合によってはプログラムの発動

も許可する」

いつかこんな日がくることは分かっていた。暗屠を統括するにはあの人は純粹すぎた。ケイオス遺伝子の保有所を消去するという暗屠の名目が崩壊しかかっているのは秦野も感じていた。だが自分はここにとどまるだろう。あの人のように、この生活を今更変えることはできない。

私は暗屠を続ける。今度会うとき、あなたは対象者だ。

薄らいでいく意識の中で、秦野は決心した。

悲しみも躊躇も制御して。

草壁

「綾人君。大丈夫？」

しきりにあずさが心配そうに訊ねてくる。ラグエルは「もう少しよ」と言って綾人に歩調を合わせる。

なんだ、この痛みは？

綾人はさっきからひどい頭痛に襲われていた。秦野を逃した直後に異変は現れた。歩き出そうとしたところで、視界がかすむほどの痛みが頭に走り、うずくまった。

今は何とかラグエルに肩を借りて歩いている。

「あ、見えた！ あのアパートだよ」

あずさが指差す先を見ると、立派なマンションがそびえ立っていた。

あなたたちの資金源は何ですかと訊きたかったが、頭の痛みで声も出せない。

「前もって言うておくけど、あそこに住んでいる人は隔離世の人間じゃないから」

「え、でも仲間って……くっ」

ラグエルの言葉に思わず返してしまったが、自分の声が頭に響いて途中でうめき声をあげる。

「まあ黙って聞きなさい。ここに住んでる男は遠山直紀っていうんだけど、デイスコードされてない完全な一般人よ。でもどこかの軍と強力なコネクションがあるみたいで、武器弾薬を私たちに提供してるのも彼よ」

コネクションの強さの問題か？ 横流しとか流出って言うんじゃないか……

突っ込みたいところだったが、もちろん口には出さない。痛いから。

「彼が私たちの前に現れたのは、2年ぐらい前かな。管理システム

のコンピュータに侵入したときに私たちの事を知ったらしいわ。本人曰くね。それからちよくちよく私たちの手助けをしてくれるわ。今のところ怪しい行動とかはないからスパイではないと思うけど……」

思わせぶりな言い方だ。

「けどなに？」

あずさが代弁して質問してくれる。

「管理システムのコンピュータに侵入したり、武器弾薬を手に入るあたり普通じゃないわね。武器にしたって自衛隊や警察では採用されてないものばかり。それにあらゆる知識も豊富。私の神学論や、コギトの哲学論と普通に話を合わせられるし」

そういえば、ラグエルって天使名みたいだ。

「でも遠山さんいい人だよ。恋人の京子さんもいい人だし」

あずさが言う。

「あ、言い忘れてた。彼、同棲してる女性がいるから。彼女も全て知ってるから」

どうなってるんだ。普通の人と接触したらいけないじゃあないのか。いや、普通の人じゃあないか。

そんなことを考えているうちに、頭の痛みも少し治まってきた。

「もう大丈夫です。一人で歩けます」

ラグエルの肩から手を離す。

「大丈夫？ まだちょっと顔色青いよ」

あずさが心配そうに綾人の顔を覗き込む。

「ほんとに大丈夫だから」

笑顔を作って見せたが、どうにも弱々しかったらしい。

「ほんとに？」

「ほんとだって。なんなら肩貸そうか？」

あずさが首を横にぶんぶん振って笑う。

「綾人。聞いておきたいんだけど。さっきなにがあったの？ 車が爆発する前あたりから詳しく聞かせて」

ラグエルの問いかけに、

「ああ。あれですか」

と切り出して、説明していく。少し頭が痛んだが、さっき自分の身に起こったことを洗いざらい話す。

「きつと、守護天使だよ。やっぱり」

最初に意見を述べたのはあずさだった。

「姉さんもよく言ってるじゃない。人が生まれるときには一人の守護天使がつくって」

「神学上の話よ。都合のいい事を神のおかげにして、悪い事を悪魔のせいにする。人間が生きる事を信じるために作った二元論よ。残念だけど、現実になんか起こらない」

「でも起きたよ」

あずさが嬉しそうに言う。

「問題は、パルスロックをしたってことよ。ひょっとしたらあなたは、神楽と同じ能力を持っているのかもしれない」

ラグエルが綾人を見る。あずさもつられて見る。二人の視線を受けて、考える。

この力は武器になるのだろうか？ まったく制御できない能力が役に立つのだろうか。いつ発現するかも分からない。だが秦野を追い詰めることはできた。秦野……

「そうだ！ 電視者って何なんですか？」

あいつが言っていた言葉。明らかに綾人のことを指していた。

「さあ。聞いたことないわ」

「綾人君の昔のあだ名とか」

あずさの発言は聞き流す。

「でもあいつは俺をそう呼んだ。どういう意味だ？」

そのとき、あずさが前方に何かを見つけたようだ。

「あ、遠山さんだよ。あれ？ 隣にいるのキルかな？」

「え？」

驚いて二人が前方を見る。

そこには二十代後半くらいのメガネをかけたインテリ風な男と、相変わらず無愛想な表情の大男が立っていた。

「遠山さん。こんばんは」

言いながら走り出すあずさ。

「無事だったのか。よかった」

ラグエルが安堵のため息をついた。心底安心したかのような。

遠山のマンションに通されたのは、綾人だけだった。残りの者たちは、さっきの戦闘で負傷したコギトが寝かされている場所へと向かった。

「コギトの様子が心配かい？」

やさしげな口調で聞いてくる。

「彼は大丈夫だよ。軽く足を撃ち抜かれたただだからね。弾は貫通しているらしいから、そう心配すること無いよ。ま、本人談だけだね」

それは大怪我じゃあ……

そう思ったが、遠山がやけに笑顔で言うので聞くのはやめた。このあと会えば分かるだろう。

奥へと綾人を招き入れる。小部屋に通されると思っていたが、そこはダイニングキッチンだった。

「京子。コーヒーをいれてくれ」

奥へ向かって呼びかけると「はい」という女性の返事が聞こえる。

テーブルに座り辺りを見渡す。こざっぱりとした、どこにでもあるダイニングだった。奥から遠山と同じ年齢ぐらいの女性が、ゆっくりとコーヒーを二つ持って来る。長い黒髪の美人。それだけ言うラグエルに似ているように聞こえるが、実際はぜんぜん違った。

ラグエルにある、凜とした感じや、シャープな印象がまったく感じられない。対照的におっとりとした人を安心させるような感じをもっている。

綾人は久しぶりに大和撫子という言葉を出した。

「あれ？ 二つだけかい。君の分は？」

「あたしはもう寝るから。戸締りよろしくね、直紀。それじゃあ、ええと……」

と綾人のほうを見る。

「こちらさっき話した、椎名綾人君。もう名前忘れたの？ 食っちゃ寝ばかりやってるからだよ」

彼女は膨れ顔をつくって、

「そんなことしてません」

と抗議する。遠山は相変わらずニコニコしている。

「それじゃあ綾人君、ゆっくりしていったね。誰かさんと違って、あたしは明日仕事があるから」

と遠山の方を一瞥して部屋を出て行く。

「やれやれ。まるで俺が仕事して無いみたいじゃないか。こう見えても忙しいんだよ。今レストランの改装を依頼されてね、経営コンサルタントみたいなのを今までやってたから。そのついでね」

なぜか綾人に言い訳をする。

「彼女なんか近くのスーパーでバイトしてるだけだよ。俺の方が稼ぎがいい月だってあるのに、仕事して無いみたいに言われたら心外だな」

だんだん愚痴になってきた。

「あの、俺をここに残した理由はなんなんですか？」

このままだといつまでも本題に入れないような気がして、自分から聞いてみた。

「ああ、そうだね」

遠山がコーヒーを一口飲んで綾人を見据える。

「それは、君が本物だからさ」

「え？」

「長年あいつらが探していた物件だ。もっとも、確かめるひまも無く奴らは殺していった。それほど恐ろしかったんだな」

「何が？　もしかして、俺……」

「そう。タイプGの対象者、電視者だよ」

遠山は相変わらず微笑んでいた。

この人は、あの言葉の意味を知っている。綾人は言葉を失った。聞きたいことがありすぎて、何から言えばいいのか分からない。

「少し話が長くなるが聞いてくれ。これから言うことは、隔離世の人間の中でもキルとコギトぐらいしか知っている者はいないだろう。話は二年前にさかのぼる。暗屠の成功者の一人、しかもとても優秀だった者があるときシステムに疑問をもった。暗屠の洗脳プログラムが彼には効かなかったんだ。彼はデイスコードの意義については熟知していた。すなわち、ケイオス遺伝子保有者の消去」

心臓の鼓動が早くなる。それがデイスコードの意味。それが俺たちの狙われている理由。

「ケイオス遺伝子というのは、武藤英志という老科学者の遺品だった論文の中から発見された。彼は軍事開発をしていてね、死後に何か役立つものはないかと軍が調べていたんだ。あつと、この軍は自衛隊ではないとだけ付け加えておく。そこには彼が開発したケイオスウイルスの原型であるケイオス遺伝子の記述が載っていた。ケイオスウイルスとは、感染者の自我を崩壊させ凶暴性を高め、ひいては肉体までも変化させるウイルスだ。そして、ある種の電波によってしか発症しない。そんなものの元ネタを持っている人間がいることが分かった。しかも思ったより多く。そして管理システムに新たな端末『暗屠』が作られた。あ、言っておくけど俺もシステムについてにはよく分からないから。その当時にはもうあったってことぐらいだな」

「それはいつのことです？」

「暗屠が組織された頃かい？　だったら五年前だな」

「そうですか」

綾人は静かに言った。あまりに現実離れた話で、驚きや悲しみと言った感情が麻痺していた。

「そんなこんなで暗屠が組織されたわけだが、最初のころは孤児や身寄りの無いホームレスを訓練して使っていたんだ。もちろんそれなりに洗脳をしてね。やがて構成員が孤児中心になっていく。そしてその中から成功者が数人生まれた。その中の一人が、さっき言ったやつだ。きっかけは些細なことだった。自分が成功者として得た知識の中に遺伝子工学に関する分野が欠落しているのに気づいた。そこからケイオス遺伝子について疑問をもったわけだ。そして、システムに問いただしてしばらくした後、彼は消された」

「なぜ？」

「さあね。疑問を持つ者は暗屠に必要ないと思ったのか、それとも遺伝子がでっち上げなのか。今となっては分からない」

長い沈黙が流れる。

「君が今何を考えているかは分かるよ。ケイオス遺伝子という理由がでっち上げなら、なぜ自分たちは狙われるか、だろ」

凶星だった。

「君とコギトとキルについては、俺は知っているよ」

「え？」

怪訝そうな目を遠山に向ける。依然として微笑んでいる。

「キルは元々は優秀な自衛隊員だった。しかもけっこうな階級だったんだよ。あるときに暗屠の一人から助けを求められた。それがさっき言った、殺された暗屠の……」

「キルは彼に会ったんですか？」

話の途中で思わず興奮を押さえられずに口を挟む。

「話は最後まで聞けよ。キルと接触したのは彼じゃない。コギトだ」

言っている意味がわからない。なぜそこでコギトの名前が？

「キルに助けを求めたのは、殺された暗屠の友人であり暗屠成功者の一人コギトだ。もっともその頃は別の名前だったが」

コギトが、暗屠？ そんな馬鹿な。彼は隔離世の人間で、俺を救ってくれました。

「コギトにも洗脳は効いていなかったらしくてね、友人の話を聞い

て疑いを持ったらしいよ。そして彼が殺されて確信した。システムの狙いは違うと。そこで、自衛隊の中で一番信頼が置けて優秀なもの、軍がスカウトしたがつている人物に接触したと言うわけだ。それが発覚してコギトとキルはデイスコードされた」

「ちよっと待ってください、軍ってさっきから、どこの軍隊なんですか？」

「まあ、それは今は知らなくていいよ。今回の件に軍は絡んでないからね」

そう言われては黙るほかない。突然の展開についていけない綾人を尻目に、遠山は話を進めていく。

「それでは君の番だが。君が、いや君たち一家がデイスコードされた理由は、素質を持っていたからだよ」

「素質？」

「君の家系は電視者になりうる可能性があった。つまり、コギトの友人でもあり殺された暗屠、システムの異常にいち早く気づいた男、草壁を見ることが出来るかも知れないということだ」

「彼は死んだんでしょ？ まさか俺の家系がイタコだったとか？」

綾人は真剣に言ったのだが、何を思ったのか遠山は吹き出して笑った。

「ははは、イタコか。そりゃいいね。確かに恐山に行けば草壁に会えるかもな」

遠山は腹を抱えて笑っている。自分でもばかげた考えだとは思っていた。でも、それ以外には思いつかない。何かあるのか？ 綾人の目つきが鋭くなる。

「笑ったのは悪かったよ。そう睨まないでくれ」

綾人の目を見て怒っていると思ったのだろう。違いますよ、と言うおうと思ったところで遠山が再び話を続ける。

「ま、正確に言うと草壁が見えるわけじゃなくて、草壁の残した対暗屠プログラムが見えるってことだ。その分野にかけては、奴は天才的だったらしい。死ぬ前に暗屠に対抗できる者を造った。それが、

そのプログラムを受信できる者だ。正確には、暗屠のプログラムを不特定の人間に受信させるものを作った。だから今もどこから草壁のプログラムが日本中に発信されている」

では、自分が見た少年や文字は全て草壁のプログラム。あの時、秦野にロックをかけたのも全て草壁の残したプログラム。

「さっき話を聞いて分かったよ。君はパルスロックまがいのことをしたらしいね。おそらく、プログラムの中身は暗屠の全てだ。そして、位置認識もできる。これは大きな力だ。プログラムを受信できる人間は、暗屠にとっても脅威だろう。だから、君にはここに残ってもらった。選択をしてもらうために」

遠山が初めて真剣な表情を見せる。

「君の能力があれば、暗屠から逃げることはたやすいことだ。やつらも追う事はしないだろう。むやみに殺されたくは無いだろ。どうする？ 闘うか、逃げるか」

「これはあなたの一存なんですか？」

毅然と言い放った。

「いや。コギトとキルに頼まれた」

「どうして？」

「彼らはこれから暗屠壊滅に動き出す。そのために、最後の選択を君に与えたんだろう」

綾人は静かに目を閉じた。

秦野への復讐はまだ終わっていない。戦う理由はそれだけで十分だった。だが、それ以上に死なせたくない人間もいる。

もう知っている人間が死んでいくのはたくさんだ。

俺が力になることができるなら――

「やります」

目を開けて答えた。

「暗屠をぶっ潰します」

遠山は頷いてから立ち上がり、奥の部屋からアタッシュケースを持ってくる。

綾人の前において、

「持っていきな」

と言いながら中身を見せる。

まがまがしく美しい黒い輝きを放つサブ・マシンガンが姿をあらわす。

「MP―5だ。きっと役に立つだろう。使い方はキルにでも聞くといい」

綾人にケースを渡す。

「ありがとうございます」

お礼を言って立ち上がる。

「皆がいるのは向かいのマンションの121号室だ」

玄関に向かいながらふと立ち止まる。

「遠山さんは何でそんなに知っているんですか？」

振り向くと、遠山は微笑んでいた。

「ケイオスウィルスの開発者、武藤英志の後継者だったのさ。あいつを殺したのも俺だけだね。詳しい話が聞きたかったらまたおいで」
特に深い意味を考えずに、この人は凄い人だと思った。

「それじゃあ、また来ます」

それだけ言って部屋を出て行く。遠山に対して疑いなどは持たなかった。

その話はまた聞くか。そう思いながら外へと踏み出す。

「死ぬなよ」

背後からかすかに遠山の声が聞こえた。

それぞれの立場

ドアを開けて綾人を迎えたのは、相変わらず無愛想な顔をしたキルだった。

「来たのか。覚悟はいいか？」

「ここまできて今更聞くことは無いでしょ」

綾人は笑って見せた。

「それは？」

遠山からもらったアタッシュケースを指差す。

「MP―5です。遠山さんからもらいました。後で使い方教えてください」

「あいつ、まだこんなものまで隠していたのか。まったく。使い方は後で教えてやる。早く中に入れ」

言われるままに中に入ると、リビングでコギトとラグエルが雑談していた。

「あれ、コギト？ 足を撃ちぬかれたんじゃない？」

綾人は目を丸くする。

「軽いかすっただけだよ。誰がそんな事言ったの？ あ、遠山さんだろ。あの冗談好きだからなあ」

遠山の笑顔を浮かべながら、ちよっとした怒りが湧き起こる。これでもけっこう心配していた。

「座りなよ。ここはばれること無いから安心していいよ。どうやら僕のコンピュータは暗屠にハッキングされてたみたいだね。隠れ家リストを全部マークされてたようだよ。ここはまだリストに加えてない所だから大丈夫だよ。ところで、それなに？」

キルと同じようにアタッシュケースを指差す。

「遠山さんからもらったMP―5です」

「凄いね」

コギトが驚きの声を上げ、ラグエルがため息をつきながら、

「なんでそんなものまで持ってるわけ？ グレネードランチャーでも持ってそうね」

「以前もらったことがある」

と、突然キルが後ろから言う。ラグエルはそれ以上何も言わなかった。

「あずさはどこですか？」

どこへいったのだろうか。姿を見かけない。

「寝てるよ。今日はいろいろあったから疲れたんだろう。君が来たら起こしてくれと言っていたけどね」

「いいですよ。せっかく寝てるのに」

そうは言ったもののちょっと嬉しい気もした。

「そうもいかないよ。後が怖いからね。ラグエル、あずさを起こしにいつてきてくれないか？」

ラグエルが面倒くさそうに立ち上がる。

「あの子一度寝たらなかなか起きないのよね」

文句を言いながらも奥の方へと歩いていく。綾人は手近な場所に座り、キルもさっきまでラグエルがいたところに座る。

「さて、どうせ彼女たちはしばらくこないだろうから、今のうちに言っておこう。全部聞いたんだろ？」

「はい」

短く答える。

「ラグエルたちは知らないことだから黙っていてくれ。君の力について説明しておいた。神楽と同じで超能力だね」

説明になっているのだろうか。綾人が不信げな顔を見るとコギトは悪戯っぽく笑って付け加える。

「この世には科学で説明できないことがたくさんあるんだよ」
確かにそうだが。

「もっとも、神楽の能力は超能力としか言いようが無いね。やつもどこかからプログラムを受信しているかもしれないが」

「おい。早く本題を話せ」

キルが苛立って催促をする。

「君はいつも急ぎすぎてる。いいかい、ゆとりを持って……」

「早くしろ」

声が少々怒り気味だ。

「はいはい。あのね、さっきシステムのコンピューターに潜入したんだが、神楽が暗屠を裏切ったらしい」

奴が！ 以前あったときの奴の顔を思い浮かべる。穏やかな顔からは相反する恐怖感。本能的に俺はあいつを恐れた。

「それで成功者を皆殺しにしているらしい。昔から知っているが、奴は恐ろしく手強い。僕が暗屠から抜けたときには、すでに組織を統括していた。能力抜きにしても十分強い相手だ。彼と接触をしようと思う。君の力で分らないか？」

言われて言葉に詰まる。力と言ってもいつ発現するのも分からないのに、そんなことを言われても。

綾人は下を向いて考えた。

「おい。どうなんだ？」

キルが声をかける。

「どうすればいいか分からないんですよ？ 力の使い方が」

「無理ならいいよ」

コギトがやさしく答える。キルは鼻を鳴らす。

「綾人くん！」

部屋の奥からあずさが嬉しそうに駆け寄ってくる。

「やっぱりここに残るんだよね。姉さんが、綾人君がいなくなるみたいな事言ってたけど」

驚いてラグエルを見る。彼女には何も知らされていないはずだ。

「あんな怖い思いした後だから、コミュニティーの方へ行くかなと思っただけよ。もしそうだったら、あずさもついて行けばいいじゃない」

「駄目！ あたしは戦うの。早くこんな状況を終わらせないと。これ以上犠牲者を出さないために」

今まで聴いたことの無いような真剣な口ぶりだった。

「よし。じゃあ俺は武器を取ってくる」

キルが立ち上がった。

「どこへ行くの？ 一人では危険よ」

ラグエルの制止の声に、キルは軽く手を上げて答える。

「最初の合流予定地点の駐車場だ。あそこに止めてあるキャンピングカーを取りに行く。あの車には武器があるからな。まだリストにいられてなかったから、ばれていないはずだ」

そのまま玄関まで行って、

「コギト。作戦の説明をしておけ」

と言いついて出て行った。

「勝手な人ね」

座りながらラグエルがぼやく。あずさはキッチンの方へ向かっていった。綾人は多少嫌な予感がした。キルが一人で出て行ったことよりも、あずさがキッチンへ行ったことに。

予感は見事的中した。綾人の目の前には、奇妙な液体が置かれていた。

普通のコーヒーが飲みたかったと心の中で泣きながら、ラグエルたちのコーヒーをうらやましく眺めていた。

「さて、作戦のことだが」

コギトが話を切り出した。

「暗屠の本部が分かったんだ。そこに急襲をかけようと思う」

「なるほど。確かに今がチャンスですね」

言ってから自分の発現の間違いに気づく。

「なんでチャンスなの？」

首をかしげながらあずさが聞いてくる。

「え？ ああ。あのね……」

しまったと思ったが、なるべく顔に出さないようにあいまいに返事する。

「それはね……」

代わりにコギトが言葉をつなぐ。

「僕たちがさっき襲われたときに倒した敵に尋問したところ、他地域へ大々的な派遣をしてるらしい。だから、暗屠は今手薄なんだ」

「まさにチャンスだね！」

その言葉を鵜呑みにして、あずさが歓声を上げる。

「本部さえ潰しちゃえばあとはなんとかなるもんね。よし壊滅させちゃおう」

無邪気に喜ぶあずさの姿を見て、綾人は強い違和感にとらわれる。コギトが元暗屠のメンバーだと知ったらどうという反応をするんだろうか。ラグエルにしても、暗屠を憎む気持ちは同じだろう。

「それで場所は？」

冷淡にラグエルが口を開く。

「冗談みたいな話だけど、この市役所の地下さ」

三人の口からため息が漏れる。

「ま、入るところは別だし。造ったのがたまたま市役所の下だったって事かも知れないけどね。でも近くにあって助かったよ」

「それで？」

「作戦の決行日は三日後だ。なるべく早い方がいい。タイミングが大事だ。それまでに綾人に基本的な戦い方を教える。これはキルと君の役目だ」

「O・K」

ラグエルが頷く。

「僕とあずさは君たち三人のサポートにまわる。僕はサポートの仕方にあずさに教える。

いいかな？」

ちらりとあずさを見て、頷くのを確かめて話を続ける。

「突入するのは君たち三人というわけだ。市役所の隣の貸しビル一階にある東亜システムエンジニアというダミー会社が入り口だ。質問は？」

「ほかの隔離世の人たちはこの作戦に参加しないんですか？」

綾人が言うと、難しそうな顔をしてコギトが答える。

「彼らはこの情報に懐疑的だね。参加しようとしなんだよ。困ったもんだ」

あなたが暗屠出身だと知っているんですか、と言いそうになって言葉を飲む。また墓穴を掘るところだった。

「分かった。作戦決行日までに綾人をしっかり鍛えとくわ。そっちもあずさをお願いね」

「分かってるよ。これからはスパルタ教育だから覚悟してね」
言われたあずさは渴いた笑いを上げた。

「詳しいことはこれから順次説明していくよ。今日はここまで。みんなはもう寝た方がいいよ。明日からが勝負だから」

「そうですね。そうします」

ここにこれ以上いると口がすべる危険性があると判断して、綾人はもう寝ることにした。

「じゃあ、あたしも」

あずさも寝ることにしたようだ。

寝室に向かいながら、あずさが「がんばろうね」と声をかけてきた。

綾人はただ頷くしかなかった。これからのことを考えると、彼女の明るさがうらやましかった。

時刻は夜中の三時を過ぎようとしていた。綾人はなかなか寝付けないので、キッチンへ行って冷蔵庫をあさっていた。こういうときはホットミルクというのが、自分の中の定番だった。

カチツというジップの音がリビングから聞こえてきた。コギトがいるのだろうか。そう思いながら、ミルクの入ったカップを持ってリビングへ向かう。途中で、さっきまではなかったやけに膨らんだ旅行かばんを四つほど見かけた。おそらくこれがキルの持ち帰った武器なんだろう。

部屋を覗くと、煙を吐き出す人影がソファ―に座っていた。

「何してるんですか？」

綾人に明るく声をかけられて振り向いたその顔は、コギトではなくラグエルだった。

「あなたこそ何してるの？ それ何？」

タバコで綾人の持っているカップを指す。

「え、ああ、これですか。ホットミルクです」

てっきりコギトだと思っていたので、多少驚きながらも答える。

「いいわね。私にもくれない？」

「はい。いいですよ。それじゃあいれてきます」

綾人は再びキッチンへ戻りもう一杯ホットミルクをいれる。冷めかかっていた自分の分も温め直してリビングへと向かう。ちょうどラグエルが新しいタバコに火を点けているところだった。

「ありがと」

お礼を言われながら、ラグエルの向かいのソファ―に座る。

「タバコ吸うんですね」

灰皿には吸殻が2、3本あった。

「コギトほどヘヴィーじゃないわよ。たまに彼からもらってるだけ」
ドクロが描かれている黒いパッケージを綾人に見せる。確かにコギトが吸っている物だ。

「いる？」

ラグエルが箱を開けてこちらに見せる。なんだか吸いたい気分だった。

「じゃあ一本だけ」

綾人はタバコをくわえる。ラグエルが火を点けてくれた。煙を肺に入れる前に、その味に思わず声を漏らす。

「にがっ」

いろんなタバコを人からもらっては吸っていたが、こんな苦いのは初めてだ。

「なんて銘柄ですか？」

ラグエルがタバコをもみ消して、カップを手に取りながら答える。
「デスよ。死っている意味のね」

初めて聞いた名前だ。そんなタバコがあったのか。

「あんまり見かけないでしょ。でも私とコギトのお気に入りなの」
そう言われるとこの苦味もなかなか味わい深いものがある。

煙をゆっくり吐き出しながら、灰皿を手繰り寄せる。

「いつ死ぬか分からないから。タバコの吸いすぎで死ぬるんならその方がまだ良いわね」

悲しそうな目だった。綾人は言葉を捜すが見つからない。

「あなたはどっと思ってる？ 今度の作戦」

不意にラグエルが話しかける。

「え、いいと思いますよ。これでやつらを潰すことができれば」

「そうね。おそらく情報は確かなものだと思うし、成功するのならばそれに越したことはないわ。でも……」

ラグエルが悲しい表情を見せる。

「でも、なんです？」

「私に全て話してくれないってのは、ちょっと残念だった」

何も言えなかった。この人は薄々気づいていた。

「別に綾人に教えてくれて言うわけじゃないの。誤解しないでね。ただ、もうちょっと信じて欲しかった」

弱々しい笑みを見せながら、ミルクを一口飲む。

「愚痴ばかりでごめん。弱気になってるのかな」

「この作戦が終わったら、きつと話してくれますよ。がんばりましょう」

「ええ。よし、綾人は明日から特訓よ。厳しいわよ」

少し元気を取り戻したかのように、ラグエルが悪戯っぽく笑った。

「お手柔らかに」

綾人はゆっくりお辞儀をして、笑った。

「綾人は優しいね。それを見込んで頼みがあるんだけど」
さっと真顔になるラグエル。

「この作戦が終わったら、あずさを連れてコミュニティに行ってもらいたい」

真剣な顔をしたから何を頼まれるか心配したが、どうってないことで綾人は胸をなでおろす。

「いいですよ、それぐらい。で、なにするんですか？　そこで」

「違うの。そういう意味じゃない」

首を横に振りながら、綾人の目を見据える。

「あずさと一緒にそこで暮らしてほしいの。あの子も綾人となら納得してくれるかも知れないし」

「なんで急に？」

「もうこれ以上危険な目にあわせたくないの。あの子には普通に生活してほしい。もちろん君にも。分かるでしょ？」

「あなたは？」

「私は今の生活を変えられない。ひょっとしたら戦いが好きなのかもね。野蠻よね。こんな女」

ラグエルが今にも泣きそうな顔に見えた。

「考えときます」

それだけ言って寝室へと戻った。優しい言葉の一つもかけられない自分の不器用さを恨んだ。

発現

翌日からの訓練は、厳しいと言う言葉だけでは片付けられないほどに、ハードだった。

朝の九時に起床して、昼の二時まで近くの河原でひたすらキルと格闘戦の練習をした。最初にちよつとしたレクチャーを受けただけで、ほぼ実戦である。今まで運動らしい運動をしていない綾人にとっては、耐えがたい苦痛だった。しかもキルは手加減と言う言葉を知らないともいうように、本気でかかってきた。もちろんほとんどは寸止めをするのだが、まれに手違いで本当に殴られ蹴られた。

だが、成果はすぐに現れた。あの力の使い方が意外なところで分かった。キルの正拳を顔面にまともに食らったときに、動きさえ読めればと願ひ倒れた。

次に立ち上がったときには、

ドウサヨソク オン

と視界の片隅に文字が数秒浮かんで消えた。そして実際に格闘をしたときに、文字よりも言葉よりも早く、あえて言うなら直感だろう。キルの動きが分かった。

同時に、分かっているがどうしようもないことを綾人は悟った。体がついていけないのだ。腹を右手で殴ってくると分かっているが、それは一瞬前のことで、格闘家なんかにしたら羨ましい能力だろうが綾人にとってはまるで役に立たない。

もういいだろうとキルが終了を告げたときには、綾人の体はあざだらけだった。

地面に寝転がってドウサヨソクをオフにする。

起動方法は想うこと。それが分かっただけでも十分な収穫だな。

綾人は目を閉じて疲れのままに眠りに落ちようとした。

「こんなところで寝ると風邪引くぞ」

キルの怒鳴り声にしぶしぶ目を開けて、車に乗り込み、車内でキ

ルに力の使い方が分かったことを嬉々として話したら、

「そうか」

と一言反応しただけで、感動も何もなかった。もっと喜んでくれないのも良いのと思い、綾人は少しすねてじっと黙って車外の景色を見ていた。

やがて車が行き着いた先は、いつかきたシューティングレンジになっているボーリング場だった。

車から降りて、いつの間持ってきたのか、キルが遠山からもらったMP―5を手渡す。

「そいつを使いこなせるようにしろ」

そう言って綾人を残して一人で運転席に乗り込み車を発進させて、どこかへ行ってしまった。

「へ？」

あまりのすばやい動作に反論するひまもなく、綾人はただまぬけな声を出すのが精一杯だった。

「あれ、キルは？」

後ろから声が聞こえて、振り返るとラグエルがいた。隔離世の中でまともなのはこの人だけだ。綾人は心の底から思った。

MP―5の一連の扱い方をラグエルに教わって、休憩に入ることにした。

「前から思ってたけど、射撃か何かやってた？」

綾人がさっき試し撃ちしたマネキンをしげしげと眺める。フルオートにして装弾数限界の三十発撃ち込んだ人型の人形は、すでにゴミにしか見えない。

「いいえ」

答えながら、先ほどの感触を思い出す。MP―5はすでに武器のレベルを超えている。セミオートで一発ずつ撃ったときに思ったのだが、反動が恐ろしく少なかった。サブ・マシンガンなどももちろん撃ったことはなかったが、こんな反動であんな破壊力が出るものな

のかと驚いた。拳銃とは明らかに一線を画す威力だった。連射したときも反動の少なさは大きな命中要因となる。

「私の知り得る中で最高級の武器よ」

とラグエルが言っていたが、全く持っていてそのとおりだった。これを自分が使うことに後ろめたさまで感じる。

「本当に俺が使ってもいいんですか？」

率直に言うラグエルが意味ありげに微笑を浮かべる。

「私の秘密兵器も見せてあげましょう」

両手を上げてくると一回転をする。武器を持っていないという意思表示だろうか。

「さて私は武器を持ってるでしょうか？」

しげしげと眺めてみたが、ポケットにもそれらしきふくらみはない。綾人は首を横に振る。

もう一度ラグエルが回転したときには、手にタバコの箱ほどの銃を持っていた。

「どう？」

口をぽかーんと開けたまま、綾人は考えた。

「わかった！ 袖に隠してたんですね」

「正解。ちなみにこういう使い方もできるわよ」

銃を袖に落として、両手を上げる。いわゆる、手を上げろと言われたときのポーズだ。

そのまますばやく綾人に手を向けたかと思うと、すでに銃が握られていた。

「ま、最後の手段ってやつよ」

凄い！ 掛け値なしに感心した。あれなら絶対に避けようがない。おそらくこちらが気付いたときにはすでに撃たれたあとだろう。

「ま、これが一応私の秘密兵器P―32ね。ついでにキルの秘密兵器も見せてあげる」

ラグエルが銃のたくさん入ったスポーツバッグから、大きなスチールのケースを取り出す。中から出てきたのは、銀色に光るハンド

ガンと言うにはおこがましいほどに大きな銃だった。

「これはコルト・アナコンダって言ってね、44口径のリボルバーよ」

弾倉に弾を一発だけこめて、まだ無事なボウリングのボールが頭になっているマネキンに狙いをつける。

「アナコンダって言う名前はだてじゃあないわ。よく見ておいて。手首を痛めるから一発しか撃たないわよ」

ラグエルがグリップを握る手に力を入れているのがはた目にも分かった。

残鉄をあげて、トリガーがひかれる。

すさまじい発射音とともに、ボウリングの玉が一撃で砕け散る。

撃ったラグエルは反動で銃を頭上に持っていかれ後ずさりしている。再びバカのように口を開ける綾人。

「あなたにMP―5を持たせるのは当然の選択よ」

素直に綾人は頷いた。

キルが迎えにきた頃には、あたりはすっかり暗くなっていた。銃撃戦の基本もすでにラグエルから教わって、銃の分解組み立てという絶対に今回の作戦では使うことがないだろう事までやっていた。

「よし、帰るぞ」

キルの言葉に対して、なにがよしなんだろうかと心底思った。

嵐の前

夕食の席で、しきりにあずさが今日習ったことを楽しそうに報告していた。その後にコギトに呼ばれて彼の部屋に行った。

「やあ、てきとうにその辺に座って」

と言われてもパソコンとベッドしかない部屋なのでベッドに座るしかない。コギトはパソコンデスクの椅子に座ってくりとこちらを向く。

「力の使い方が分かったらしいね」

「キルから聞いたんですね」

「ああ。射撃の訓練やってる時間のはずなのに、興奮しながら帰ってきて教えてくれたよ」

……あのおやじ。だから帰ったのか。綾人は心の中でため息をつく。もっと素直になれよ。

「どうするんだい？」

「それはですね。思うだけなんですよ。強く」

「なるほどね」

感心したようにコギトが首を上下に振る。

「で、やってくれたかい？」

「なにを？」

そういえば、大切なことを頼まれたような気がする。コギトが困った顔をして頬をかく。

「あ！」

思い出した。神楽の所在を確かめてほしいと言われていたんだ。

「忘れてもらっちゃ困るよ」

「すいません。じゃあやってみますね」

綾人は目を閉じて、静かに想った。

神楽の所在地を知りたい。

すぐに暗い視界に文字が現れる。

アントコウセイインケンサク

カグラ

OK?

それでいい。心の中でつぶやく。

ケンサクチュウ.....エラー カンリIDオウトウナシ

「無理でした。カンリIDの応答がないらしいです」

「やっぱりそうか」

コギトは納得したようで、次の手を考えようとする。

「どういうことですか？」

綾人には全く分からない。少しはこっちの身になって説明してもらいたい。

「君がアクセスできる草壁のプログラムは、おそらく管理システムの一部にあるんだろう。そこではあらゆる情報が記憶されている。暗屠の構成員に植え付けられるIDを今探知したんだと思うが、それがはずされたみたいだな。僕だってとれたんだから、あいつがとれないことはないか」

その言葉を聞いてはっとする。

「それなら暗屠の全員の位置がこれでわかるじゃないですか」

これさえあれば、奇襲をかけることも逃げることも思いのまま。だったら作戦なんかしなくてもいいのではないのか。綾人は喜びを隠せずに言う。

「それは無理だよ。管理IDっていうのは恐ろしく高いらしくてね。暗屠でも成功者の一部にしか付けられないんだ。裏切ったらシステムにとって大きな脅威となるものだけを厳選してね」

「そうですか」

落胆のため息をつきながら改めてコギトを見る。ニコニコ笑っているが、確かにこの人はシステムにとって大きな脅威となった。

「おそらく今生きてる中でIDを持っているのは、秦野だけだろうね。やつは探知できると思う。やってくれないか？」

返事をせずにすぐに目を閉じて想う。すぐに回答がきた。

カンリIDオウトウナシ

どういうことだ？ 再び試行してみるが結果は同じだった。

「やつも探せない」

綾人はコギトの反応をうかがう。苦い顔をしながら、コギトが答える。

「圏外だ。あいつはジャングルにいる」

「ジャングル？」

驚いて聞き返す。

「ああ。暗層本部の中にジャングルがあってね。その一室に飽和酸素の細胞活性タンクがある。通称キュアと呼ばれていて、平たく言えばそこに負傷者を突っ込んだけば傷を治してくれる代物だ。そのタンクがあるジャングルだけはどんな電波も届かなくなってる」

「やつは治療中ってことですか？」

「君の話によるとかなりダメージを受けたみたいだからね。その可能性はある。ただ一つ気になることがある」

そこでコギトが話を止める。言いよんでいるような印象を綾人は受けた。

「まあいい。君には言っておこう。あそこにはキュアの他にもう一つ施設がある。システムに通じるホットラインだ。その端末を使ってシステムから人や武器の派遣要請をされているとしたらやっかいだな」

「あいつがシステムと接触しているの？」

「神楽のいない今、あいつが一番の力を持っているのは間違いない。戦闘力にしても、実権にしても」

気まずい沈黙が流れる。

「考えても仕方ないな。明日も訓練だろ？ 君はもう寝た方がいい」
こんなところでうじうじ考えても仕方がない。綾人もそう思ってコギトにおやすみを言って自室へ戻った。寝る直前まで秦野をサーチしていたが、依然として結果はオウトウナシだった。

作戦決行を明日に控えた日。綾人は午前中に昨日キルと格闘練習をした河原に連れて行かれた。練習内容が格闘ではないと聞いて安心していると、ラグエルが手榴弾の入った箱を持ってきた。手榴弾の扱いの練習のようだ。例によってキルはただ見ている。

その練習を昼過ぎまで受けて、マンションへと戻った。

そして、明日の作戦の詳しい説明がはじめてなされた。

東亜システムエンジニアの見取り図を見せながらコギトが説明していった。この会社はダミーで、出入りするものは全てシステム関係者か暗屠。入り口は奥にある隠し扉。この通路から暗屠の本部へとつながる。

そして本部の見取り図を見せる。かなり入り組んだ造りになっていた。コギトが三人それぞれに侵入順路を教えていく。

「以上が最も効率がいいと思われる道順だ。もちろんこのとおりに進む必要はないが、この通りに行けば計算上は背後から襲われる危険が最も少ない。しっかりと覚えてくれ。さて最後に質問だ。あずさには前もって聞いたが、我々がやろうとしている事は大量虐殺だ。躊躇はしないか？」

「これは戦争だ。あいつらは敵だ。降伏するようなら助けてやる」
キルらしい答えだった。次にコギトがラグエルを見る。

「躊躇なんかとうの昔に忘れたわ」

「綾人はどうだい？」

答えは決まっていた。

「俺が生き残るために。これ以上犠牲者を増やさないために。ためらうことはできません」

三人がOKサインを出す。

「あたしだって本気だよ」

あずさの言葉と同時にコギトが立ち上がる。

「決行は明日の真夜中。昼過ぎにもう一度確認を取る。それまでは各自自由に休んでくれ」

全員が無言のまま頷いた。

作戦当日の午後。あずさに誘われてコンビニへと買い物に出かけた。昨夜は緊張で一睡もできなかったが、あずさも同じようで、目の下にうつすらクマができています。

「あたしもいっしょに戦いたいけど、足手まといだもんね」

食料品を詰め込んだコンビニの袋をぶらぶらさせながら、あずさがつぶやいた。

冬のさなかの路上は、太陽が照っていていつもより比較的暖かかった。

「そんなことない。あずさだってちゃんと戦ってるよ。きちんとサポートしてくれよ、俺たちの命は預けた」

「やさしいね」

あずさは微笑んでいるが悲しそうだった。

「あたし知ってるんだよ。みんながあたしをコミュニティーに行かせようとしてること。確かに人を撃つなんてできないかもしれないし、コンピューターだってコギトみたいに扱えない。姉さんやキルのように強くないし、綾人君みたいに超能力もない。駄目だよ。あたしって」

かける言葉が見つからなかった。何かを言わなければと気持ちだけがあせる。

「きつと、邪魔なんだよね。こんな、なにもできないやつなんか」

綾人はあずさの両肩をつかんで立ち止まる。

「なに？ どうしたの？」

驚いた顔であずさは綾人の顔を見る。

「作戦前だからって弱気は駄目だぞ。あずさが強いことは俺が知ってるよ」

綾人は言い切った。彼女の心の強さは分かっていた。たぶん自分以上だろう。

あずさは口ごもってる。

「一緒に戦おう。システムを倒すまで」

その言葉を聞いてあずさが笑顔を見せる。

「うん」

嬉しそうに返事をするあずさの顔を見て、思った以上に二人の顔が近いことに気づいて赤面する綾人。思わず目をそらしてしまう。

「こういうときはキスするもんでしょ」

あずさのからかいの言葉に顔を真っ赤にして、手を離し一人先に行く。

「早く帰ろうか」

照れ隠しで早歩きになる綾人の後ろで、あずさが嬉しそうに微笑んでいた。

突入

時刻は深夜になっていた。オフィス街の静けさの中で、街頭の光だけが白いライトバンを照らしていた。その中で綾人たちは一連の確認をする。

キルは迷彩服を着ている。肩からは例のコルト・アナコンダをぶら下げて、胸前にはたくさんの手榴弾、腰にはサバイバルナイフ。何よりも凄いのは、両手にGC-9を持っている。つまり二丁拳銃だ。

ラグエルの方はいつか綾人が見た全身黒づくめの格好をしている。腰のベルトについたポケットには、GC-9のマガジンや手榴弾が入っている。

そして綾人は普段着だった。トレーナーにジーンズという格好である。ウェストポーチがついているくらいの変化である。もちろんそこにはMP-5のマガジンが限界ぎりぎり入っている。あれだけ練習したのに手榴弾は持たされなかった。一人だけ軽装で不安だったから、みんなには内緒でP-88をトレーナーのポケットに入れたくらいである。

「よし。感度は良好だ」

コギトが全員のインカムをチェックする。

「それで捉えた映像はこちらでも見る事ができる」

車内に所狭しと並べられたモニターを指して説明する。

「その映像をこっちで解析できるから、危険だと想ったら無理に踏み込むことはやめてくれ」

三人が頷く。

「死なないでくれ」

コギトの言葉にキルが鼻を鳴らし車を降りる。

「それじゃあ行ってくるわ。コギト、あずさ、サポートお願いね」

「任せてくれ」

「姉さん気をつけてね」

軽く手を振りラグエルも車外へ出る。

「じゃあ、俺も」

と言ってから、綾人は車を降りる前にあずさを呼んだ。

「どうしたの？ 綾人君」

綾人が真顔で聞く。

「前から疑問に思ってたんだけど、どうして俺だけ呼び捨てじゃないの？」

あずさは悪戯っぽく笑って、

「帰ってから教えてあげる」

と言った。

「OK。帰ってきたらキスしよう」

「え？」

驚きながら赤らめた顔で、あずさは少し考えた後、

「うん」

と答えて、綾人の銃口にキスをした。

「お守り」

その言葉を聞いて、綾人も戦場へと向かった。

「部屋の中には誰もいないようだ。踏み込んでくれ」

東亜システムエンジニアリングの前で三人に同じ指令が下された。

キルが慎重に扉を開けて中の様子をうかがう。そのあとにラグエル、綾人の順に続く。

「警備システムは本当にないのか？」

キルがインカムを通じて確認する。

「ああ。念のためあずさが今解析をしている。ちょっと部屋を見回してくれ」

三人が一樣に部屋を見渡す。

「警備システムの存在は確認できないよ」

あずさの声がインカムを通じて安全を伝える。三人は目的の金庫

のある部屋へと用心して進む。その金庫はダイヤル式のものではなく、パスワードを入れる電子式なものだ。

「あったぞ。パスワードを確認する。K M K A 2 C T N Kでいいんだな」

事前に知らされたコードをキルが復唱する。入力すれば金庫の隣の壁が開く寸法だ。

「OK」

キルが一つ一つ確認するように声を出して入力する。コードを入力してエンターを押すと同時にe r r o rが表示される。

「どういうことだ!」

あせりながらコギトの回答を求める。ラグエルは周りへの警戒を強める。綾人は「索敵」と短く念じた。

「まずいな、コードが書き換えられたのか? 仕方ない。一時撤退してくれ。作戦は失敗だ」

「そうでもないですよ」

綾人はM P ― 5を壁に向かって構える。コードを入力すれば開くようになっている、隠し扉のところだ。

「この向こうに敵がいるのか?」

「二人向かってきています」

綾人は自信を持って答える。頭に出した立体図に二つの生体反応が近づいてくる様子が出ていた。これも最近気づいた能力で、綾人の半径数十メートルをを捉えて立体図に置き換えるというものだ。

「作戦は続行する。いいな?」

「しかし、暗屠のやつらに気づかれた。危険だ」

「いつかは気づくんのだ。逆に言えば、今気づいたなら、こちらの突入に用意はされていなかったって事だ。問題はない。それよりこの壁は厚いのか?」

「多少は厚いがそれほどでもない。そんなことより作戦は……」

コギトの話を途中で切り上げて、綾人に訊く。

「敵は?」

「もう真正面です。距離約十メートル」

キルがGC―9を綾人に投げつけホルスターからアナコンダを引き抜いて、構えたと同時に撃つ。しかも親指で残鉄を引きながら速射する。反動は微塵も感じさせない。豪快な爆発音が何度も響き渡る。

「投げろラグエル！」

撃ち抜いた壁の穴はこぶしほどの大きさになっていた。キルの言葉を予測して、すでにピンを抜いた手榴弾をもっていたラグエルは、開いた穴に投げ込んだ。

綾人は慌てて爆風に巻き込まれないように横の壁にへばりつく。他の二人はすでにその姿勢をとっていた。

思ったよりも凄い衝撃はなく、ごと鈍い音がして隠し扉に亀裂が入ったくらいだ。もっとも中の者は息絶えただろう。手榴弾の殺傷力は爆発そのものよりも破片にあると聞いている。この二人が持っている手榴弾には、中にパチンコ玉や釘が仕掛けられている。

「練習通りにできたわね」

ラグエルが綾人の肩を叩いて微笑む。

昨日の練習は、自分に手榴弾を扱わせるためではなかったことがよく分かった。

キルが扉に蹴りをいれてぶち破る。

「よし、行くぞ」

その声に応じて綾人とラグエルは開いた扉を見る。真っ白な廊下が奥まで続いている。そしてこの突き当りに地下へのエレベーターがあるはずだ。

「ついてこい」

率先してキルが最初に中へと向かう。ラグエルも続いて行った。

綾人は死んでいる暗屠の二人を一瞥して、

「終わらせる」

とつぶやいて廊下を進んでいった。

一基しかないエレベーターに到着するまでに、敵はいなかった。おそらくはエレベーターを降りたところでも狙うつもりだろう。すでにそれはこちらも考えていた。

ラグエルがなれた手つきでクレイモアを三個設置する。クレイモアとは、CDケースを二つ並べたぐらいの大きさで、雑誌程度の太さの指向性対人地雷である。発動すれば正面に向かってすさまじい爆風を発生する。例に漏れず、これにもパチンコ玉がはいっている。

「O・K。」

ドアが開いたときに全ての方向へと爆発が行き届くようにセットを終える。

「おまけだ」

キルが大型の手榴弾をエレベーターの中心に置く。

「これからが本番だ。覚悟はいいな？」

ラグエルが髪をかきあげ後ろでしぼり、

「どうぞ」

と言う。

綾人は無言でMP-5のマガジンをチェックして頷いた。

キルがエレベーターのパネルを操作して、一階へと向かわせる。

静寂の中で三人が扉から離れる。箱を下ろしているワイヤーの音が響く。やがて間抜けな到着音が下から聞こえて、けたたましい銃撃音が一瞬だけ聞こえた。

全ては爆音に消された。手榴弾の爆発により綾人たちの目のエレベーターが扉を破られる。もちろん下からは銃撃の音は消えていた。

まだ煙っているエレベーターがあった場所にガスツと鈍い音を立てて、キルが壁にロープを打ち付ける。

「行ってくる」

言うやいなや、すぐさまロープを伝ってまだくすぶっている階下へと降りていく。

数発の発砲音。

「どうしたの？」

ラグエルが呼びかけると、弾丸を装填する音が聞こえた。

「止めを刺しただけだ。気にするな。それより早く降りて来い」

キルの声に促されて、ラグエルが降りていく。

綾人は震えていた。もちろん怖いからだ。

「綾人。やめるなら今のうちよ」

下からラグエルの声が聞こえた。

止めてもいいのか？ 今自分がやめたら？

迷いを断ち切るように壁を震える足で蹴った。

そしてロープを伝って降りていく。

「足が震えてるぞ」

下に着いた綾人を一瞥してキルが言う。

「気のせいですよ」

弱々しく言い返したものの、吐きそうなくらいに怖かった。足元にある死体をなるべく見ないようにする。粘着質の液体を踏んでいけることも。

「左前方に敵がいる！」

インカムからコギトの声。それよりワンテンポ早く綾人は生体反応を発見していた。

銃口を誰よりも先にその標的へ向ける。

ここで撃てなければ、俺は……

フルオートの状態で引き金を絞る。ちょうどそのときに人影が現れる。

鋭い爆発音が銃口から連続して響く。現れた人影はなすすべなく倒れていく。

倒れゆく人から血が飛び散っていくのがスローモーションのように見えた。綾人は引き金から手を離すことができず、その光景を他人事のように見た。

弾が尽きて銃口からは何も発射されなくなる。固まったまま銃を下ろす。

「人を……殺した……」

絞り出すような声でつぶやく。

「何か思ったか？」

キルのぶっきらぼうな声。

何も思わなかった。ただ空虚感が綾人を支配していた。だが、確かに目の前で倒れている人間を自分が殺した。

自分がやったことの意味を考える。

震えは止まっていた。

キルが重く口を開ける。

「殺らなきゃ、殺られる。それが今のルールだ。殺したくなければ死ね」

綾人は空のマガジンを交換する。カチツと装着音が響いた。

「まだ死ねない。死にたくない」

鋭い目つきで前方を睥睨む。

「よし、いい答えだ。作戦通り我々はこれから分散する。俺は正面。ラグエルは左。綾人は右の通路だ」

通路をあごで指して皆の反応を待つ。

「了解」

ラグエルが短く答える。

「分かりました」

綾人も頷く。

「死ぬなよ」

その言葉を残して、キルが正面の通路へと向かう。

「綾人。死なないでよ。待ってる人がいるんだから」

ラグエルが場違いなほどに優しく微笑んだ。

「あなたも」

そう言って綾人は左の通路へと向かっていった。

インストール

白く長い廊下が続いていた。綾人の担当する通路には部屋はないように設定されていた。まだ突入戦をするには経験不足だというコギトの判断だ。曲がり角から曲がり角までダッシュをかけながら進む。部屋はないが分かれ道があり、そこから挟み撃ちされる可能性もあるため、常に警戒しながら進む。最終目的はこの奥にある武器庫の破壊。それが綾人に課せられた使命だった。

視界の左端に浮かんでいる立体図を確認する。明らかに変だ。これまで一度も交戦していない。予想される敵の戦力は五人以上だとコギトは言っていた。

「コギト。敵が一人もいないぞ」

インカムへと問いかける。

「綾人君。ちょっと待ってて。今コギトは二人のサポートしてるから」

あずさの声が返ってくる。

「あずさでもいい。俺が見渡すから、その映像を解析してくれ。いくぞ」

綾人は周囲を見渡す。自分の能力よりも、最先端の機械の方が明らかに信用できるように思えた。

「どうだ？」

少しの間を置いてあずさが答える。

「武器庫あたりに多数の熱源を確認。でも、人間としては温度が低いし形もまちまち。気をつけて。何かあるよ」

「O・K」

綾人はMP-5がフルオートの状態にあることを確かめる。自分の能力では生物しか探知できないことは分かっていた。そうになると昔映画で見たリモコン操作のマシンガンなどが置かれているのを想像する。

今いる通路から武器庫までは角を二つ曲がったところだ。慎重に進んでいく。後ろへの警戒も怠らない。

やがて武器庫の扉の前にたどり着く。電子ロック式の扉で、パスコードはすでに教えてもらっている。

「扉の前に着いた。あずさ、画像を分析してくれ」

返事がない。

「おい！ どうした？」

まさか、何かあったのか？

「応答しろ！ おい！」

何度呼びかけても返事はない。インカムは無音だった。通信をキルに切り替える。

「大変だ！ あずさ達からの応答がない！」

こちらからも返答はなかった。あせる気持ちを押さえて次はラゲエルに切り替える。

「応答してくれ！」

声はなかった。いやな汗が噴き出してくる。

俺の機械が壊れたのか？ それならラゲエル達は大丈夫だ。自分の置かれた状況の分析を試みる。他の者が大丈夫なら安心だ。自分を納得させる。

その時扉の中に生体反応を捉えた。冷静に角に隠れて様子を窺う。さっきまでは確認できなかったはずだ。しかし確かに今は存在を確認できる。綾人は体を半分出してMP―5のトリガーに指をかける。

ゆっくりと扉が開く。

誰かが出てくる！ 熱源に向かって狙いを定める。

そして綾人が目にしたものは、累々とした死体の山だった。あたりは血の海と化していた。一瞬あっけにと取られていたが、あわてて捉えた者を探す。

そんな馬鹿な！

綾人は動揺していた。熱源が消えたことよりも、あいつが目の前

にすることに。

死体の山の後ろに立って、神楽は悠然とこちらを見つめていた。まるで通りすがりの人間のような服装だった。どこにでもいる少年。街で見る大勢の中の一人。ただ、彼は死体の山を築いていた。

「久しぶりだな。コードクサカベ」

パーカーが返り血で赤く染まっている。手にはコンバットナイフを持っていた。もちろん血がべっとりについている。

綾人は銃を向けながら警戒した。すでに神楽をロックできるようにプログラムを起動させる。

ロックタイショウシヤ↓カグラ

視界に文字が浮かぶ。

「どうしてここに？ おまえの目的は何だ？」

神楽はサバイバルナイフの血を服で拭いて、腰にあるナイフケースにしまう。綾人は死体を一瞥する。おそらくあずさが見た熱源は死体のものだったのだろう。しかしなぜこいつの熱源は確認できなかったのか疑問は残る。今は綾人にも生体反応が確認できる。

「おまえらではあいつに勝てない。だから忠告に來ただけだ。いつておくが今のおまえはただの足手まといだ。すぐに仲間と連絡を取って撤退しろ」

「どういう意味だ？」

「プログラムを受信できるだけでは秦野には勝てない。もちろん他の仲間もな。どうせおまえは俺の熱源が確認できなかったくらいで動揺してるだろう。そんな奴には無理だ」

凶星だった。神楽は淡々と言葉を続ける。

「可能性の一つとして考えていただろうが、俺もおまえと同じプログラム受信者だ。俺はプログラムコード24321を受信している。草壁は俺の受信しているプログラムを模して、新しいプログラムを作った。それがコードクサカベだ。システムの方もなぜそんなオリジナルが存在するのか知らない。草壁は知っていたらしいが、すでに殺したあとだった。いわば俺たちは不確定要素だ。誰もわからない

い力だ。システムを潰すには絶好の存在だと思わないか？　だから今は逃げろ。秦野にはかなわない」

敵意はないようだ。しかし綾人は決めかねていた。こいつを信用していいのだろうか。にわかには信じがたい話だ。それになぜ秦野を恐れているのか分からない。あいつはただの成功者じゃないか。以前追い詰めたこともある。

「秦野は恐れるに値しない。俺はこのまま作戦を実行する。システムを潰したいんならまず俺たちを手伝ったらどうだ」

猜疑心が完全にとかれた訳ではない。銃を構えたままで話す。

「おまえが言う秦野はC－4マニアの秦野だろ」

「秦野が二人いるのか？」

綾人は目を見開いた。

「そうじゃない。戦闘プログラムを起動させた秦野のことだ」

「何を言ってる？」

「あいつには特殊なプログラムが組み込まれている。起動させれば俺にも匹敵するだろう。戦闘のためにシステムが作り上げた実験的なものだ。おまえは俺が探知できないだろう」

そうだった、それは大きな疑問だ。

「おまえのインカムに映らないように、電子的な防御膜を張ったんだ。噂によればあいつはその膜を俺よりも大きく作れる。どういうことか分かるか？」

綾人は答えずに続きを待った。

「あいつの前では電子機器は役に立たないと言うことだ。もつとも、完全なロックは無理だが、俺たちの力は通用するようだ。コードの電波は強いらしいな。これは実験済みだから間違いない。そしてもう一つの問題が、プログラムを起動させたあいつの身体能力は、人間を超えている」

なんてことだ。綾人は舌打ちをする。あの時殺しておけばよかった。

そのとき最悪な考えが頭をよぎる。今のインカムの不通はもしか

して。

「まずい！」

綾人はあわてて引き返す。

「どうした？」

後ろから神楽が声をかける。

「インカムがさっきから作動しない。秦野はすでに起動しているんだ。早く加勢に行かなければ」

追いついた神楽が強く腕をつかんで綾人をとめる。

「なにするん……」

振り返った神楽の顔を見て言葉に詰まった。さっきは遠目だったから分からなかったが、無数の傷を負っている。返り血と思われた服の血も、いくぶんかは自分の血のようだった。

「おまえ、怪我を……」

「気にするな。半分は返り血だ。さっきまで戦闘プログラムを起動させたじじいと戦っていた。そのときの怪我だ」

神楽がちらりと見たほうには、老人が血まみれで倒れていた。こんな老人に神楽が追い詰められたのか。綾人は息を飲んだ。

しかし、これほどの怪我でも平気な顔をして立っていられるこいつも恐ろしい。

「それよりも、おまえが行ってどうする。言っただろ、足手まといだ。まだコギトを呼びに行った方がましだ」

「なんでコギトが上にいることを知っているんだ？」

「あいつから作戦の概要は聞いている。もっとも、忙しくてメールを見ただけで返事は返してないがな」

「なぜ接触してこなかった？」

神楽は苦々しげな笑みを浮かべる。

「じじいと戦っていた。あんなにてこずるとは思わなかった」

二日以上も戦っていたのかと訊きたかったが、時間が惜しい。

「コギトを呼びに行けばいいのか？」

「いや。あいつは所詮ただの成功者に過ぎない。戦闘能力において

はキルやラグエルの方が上だ。データ上はな」

こいつの口から二人の名前を出されると、無性に違和感を感じる。
「だったらどうすれば？」

「いますぐ逃げろ」

その一言を聞いて綾人は神楽の胸倉をつかんだ。

「そんなことできるわけないだろ！ 二人はどうするんだ！」

「諦めるほかない。おまえはもっと強くなる。それまで逃げろ」
そんな事できるわけないだろ！ 綾人は手に力をこめる。

「俺は戦うからな！」

言い放って手を離し、歩き出す。

「ちっ。強情な奴だ」

神楽が不快な表情で粒やいて、綾人の肩をつかむ。

「待て！」

もう聞く気はない。警戒しながら廊下を進んでいく。神楽が後ろから呼びかける。

「育成プログラムCをインストールしろ！ 戦闘技術に関するものだ。一部なら脳に負担を与えない。早く組み込め。もし逃げる気があるなら俺と来い」

綾人は振り返り神楽を睨み、

「育成プログラムCインストール」

と言った。そして、意識はここで消失した。

キリングマシン

混濁する意識の中で、綾人は声を聞いた。

二種類の音程のその声は機械的なようでいて、とても澄んでいた。純粹な苦痛の中で、声が響くときは一切の感覚を失った。

意味はまったく分からない。ただ浮遊感があった。記憶の残像がかすかに浮かび上がる。

そこにいる少年が語りかける。

僕を殺して、と。

少年は男につれられて綾人を見ていた。その男が誰なのかはすぐに分かった。草壁だ。一度もあったことはないが確信できた。

そして、悲し過ぎる顔をしている少年は、全ての始まりにあったあの少年だった。

ようやくスケッチできなかった意味を悟る。その子の顔は、あまりにも悲しすぎた。

それが望みなら、殺してあげるよ。

そう思ったとき、少年が優しく笑い意識が収縮した。草壁が微笑むのが分かった。

目を開けると神楽が見えた。自分は立ったまま気絶していたようだ。

「どのくらい意識がなかった？」

時間を確かめようと神楽に訊く。

「もうインストールしたのか？」

神楽が楽しそうに笑う。

「どのくらいだった？」

いらだたしく同じ質問を繰り返す。

「一秒もないさ。早く行くぞ」

時間感覚の奇妙さにとらわれながらも、綾人は頷いた。神楽がゆっくりとした足取りで普通に歩き始める。綾人もあわせてついてい

く。

「おい。おまえ逃げるんじゃないのか？」

神楽に問いかける。

「そうもいかなかった。自己診断したら、俺の体はもって一時間だ」

そういえば顔色が悪い。

「俺はキュアを使いに行くだけだ。そこで頼みがある。おそらく痛覚オフの機能がきれたら気絶するだろう。ジャングルの中ではコードは使えないことは知ってるだろう」

「ああ、圏外らしいな」

まるでケータイの話のようだ。

「俺を運んでくれ。任せたぞ」

それには答えずに、綾人は別の質問をする。

「さっき意識の中で少年に会った。何者だ？」

暗屠の者らしき死体が転がっているのが見える。どうやらキルの担当ルートに合流したらしい。

「あいつがシステムだ」

綾人は目を見開く。

「どういうことだ？」

「あいつがシステムの具現化した姿だ。おまえがインストールしたプログラムはシステム内部のものだ。だから、奴に会ったんだろう」「殺してくれと言っていた。それに以前にも会った」

神楽は無表情に首を振る。

「システムのことは誰も分からない。おそらく中枢の人間も。おまえが聞いた言葉もおまえの願望かもしれない。ただ一つ確かなのは、それがあるということだ」

それについて深く考える暇はなさそうだ。

綾人はMP―5のセーフティーを確認する。右の扉に二つの反応を確認したからだ。

「やるのか？」

神楽が面倒臭そうに言った。

「ああ」

答えて頷くと、神楽がやれやれとでも言いたげな表情で扉を見る。
「ロックしてやるよ」

扉を凝視する神楽。その隣で綾人は電子ドアをオープンさせるように設定する。ただ想うだけで、扉にパスコードが打ち込まれていく。さっきインストールしたプログラムのおかげで、能力の使い所が飛躍的に分かった。

「まずい！ 奴だ！」

神楽が横にとび、ドアが勝手に開く。綾人も危険を感じて身をひるがえす。

すさまじい銃声は何発も響き渡る。さっきまで綾人たちがいた場所に向けられて。

すかさず銃を構えてドアの横にへばりつく。ドアの中に銃口だけ向けて撃ちこもうと、フルオートになっていることを確認する。

心の中でカウントを数える。そのとき中から一人飛び出してきた。まるで投げ飛ばされたように。

とっさに銃を向けると、それはキルだった。

全身血まみれで息も途切れ途切れだ。虚ろに目を開いている。生きてるのが不思議なように思えた。

その姿に目を奪われた一瞬に、横に人の気配を感じる。

綾人は即座に銃を構えなおし、気配に向かってトリガーを引く。

目の前には、秦野の顔があった。フルオートで発射された弾丸は、秦野に銃身をつかまれすぐそばの壁に穴を開けていく。

「いい武器だな」

そう言って秦野は綾人の腹に蹴りを入れる。鈍い音がしてその勢いで後ろへ吹っ飛ぶ。

うめきながらも綾人は自分の武器を探す。

後ろからナイフで切りかかった神楽は、秦野に銃弾を撃たれ仕方なくよけて距離をとる。

「これを探してるのか？」

嫌な笑みを浮かべる秦野の手には、MP―5が握られていた。綾人は中腰の姿勢でいつでも飛び込めるような状態をつくる。

あいつが銃を握りなおすときに突っ込む。チャンスを探いながら綾人は強烈な腹部の痛みを押さえる。

「誰かと思ったら神楽さんもいたんですか。てっきり視聴者だけかと思いましたよ」

不意に秦野が綾人から視線をそらす。

チャンスだ！ 綾人は足に力をこめる。

「やめろ」

冷静な神楽の声は綾人に向けられていた。その声に驚いてタイミングを失う。

なにするんだ！ 心の中で舌打ちをする。

「どうかしたんですか？」

神楽に向けられた秦野の顔は穏やかだった。

「いや。あいつが秦野さんに突っ込もうとしてたから止めたただけだよ」

「賢明ですね。あなたの判断力はすばらしい。そんなことをしたら、私が彼より早く動いて銃を構えることは目に見えてますからね」

秦野が嘲笑を浮かべて綾人を見る。そして視線を神楽に戻す。

「どうするつもりですか？ いくらあなたでもこの状況は変えられないでしょう。それにずいぶんひどい怪我をしているようだ」

「秦野さん、あなたは私のもっとも信頼する部下でした」

「光栄です」

綾人は秦野の背後でぐったりと倒れているキルの様子を窺う。少しだが動きがあった。ゆっくりとだが、彼は震える手でコルト・アナコンダを秦野に向ける。

「早く殺したらどうですか？」

神楽の言葉が時間稼ぎのように思えた。綾人は気づかれないように秦野に視線を向ける。

「ものには順序があります」

刹那、目にもとまらぬ速さで秦野がそのままの姿勢で、銃口だけ後ろに向ける。

「デイスコード」

短くその言葉を発したあと、フルオートの状態になっているMP―5が火を噴いた。

爆竹の音のような爆発音と同時に、綾人の目の前でキルの体が無残に撃ち抜かれていく。

「てめえー！」

綾人はトレーナーのポケットにあるP―88をすでに手に構えていた。

だがトリガーに手をかけたときには、すでに秦野は綾人に向かって発砲した後だった。

瞬間的に危険を判断して横っ飛びしたが、数発が足をかすめてそのまま倒れこむ。手からは銃がこぼれ落ちる。

「神楽さん。こいつの次はあなたですよ」

倒れている綾人の側によってきて、秦野は悲しそうに笑う。

「あなただけは殺したくなかった」

棒立ちのままの神楽が始めて動きを見せた。つらそうな表情で、右手で頭を押さえる。

「同感です」

それだけ言うと、突然異変が起こった。秦野が苦しそうに顔をゆがめる。

「う、動きが阻害されている？ まさか、多重ロック！ パルスロックの……プログラム自体をインストールした……のか？」

苦しそうに神楽が頭をかきむしりながら答える。鼻からは血が出ている。よく見ると、目からも血を流していた。赤い涙を。

「そう……ですよ。五重のろっく……は……効くでしょ……う。脳の……許容量……こえてます……けど……ね」

チャンスと見て綾人は銃を探す。キルの目の前に彼のリボルバー

が落ちているのが目に入る。撃たれた足に痛みが走る。

「痛みは消えろー!」

叫びながら銃をめがけてダッシュする。

ツウカク オフと機能が表示される。

後ろでMP―5の発射音が響く。気にとられているヒマはなかった。綾人はコルト・アナコンダに飛びつく。

構えて振り向く。秦野がこちらに向き直るところだった。後ろには頭を撃ちぬかれた神楽が見えた。

トリガーを引いたのは綾人が早かった。轟音とともに弾丸が飛び出す。秦野もすでに撃ち始めていた。だが綾人は銃を撃った反動で後ろに大きくのけぞっている。

おかげでMP―5の弾丸が目の前をかすめていく。撃鉄を引き起こし二発目の用意をする。

秦野に向き返るとさっきの一発が右腕を撃ち抜いたようで、銃を持ち替えようとしている。

これで終わりだ。

綾人は射撃場で習ったポジションを取る。今度は足を踏ん張り、頭に狙いをつけて素早い動作で撃つ。

重い反動が手にかかるが、姿勢は崩さない。

――重厚な発射音。

信じられないことに、秦野は音と同時に体をずらす。弾丸は頭をかすめるのみだった。あわてずに撃鉄をもう一度起こし秦野に突っ込んでいく。

すでに秦野はこちらに銃口を向けていた。

綾人は突っ込みながらも体をひねり、進路を変える。

迷わずに追ってきた銃口が火を噴くと同時に、スライディングの要領で秦野の足元にすべる。

狙いは決まっていた。上を向いてMP―5に向かって引き金を絞る。

爆音と金属音が同時に響き、MP―5がはじけとぶ。秦野は手を

押さえながらあとずさる。

すぐに起きながら再び撃鉄を起こす。

秦野はものすごい速さで逃げていこうとする。

「死ね！」

その背に向けて引き金を絞った。

カチッという音がするだけで、弾が発射されることはなかった。

弾切れだった。

すでに秦野は角を曲がって見えなくなっている。

「クソッ！」

壁を思いきり叩きながら、綾人はその場に立ち尽くし秦野の行く先をサーチする。

「ジャングルか」

呟いて、倒れているキルへと向かっていく。

無数の銃弾が撃ちこまれた体は血だらけで、見るも無残だった。

綾人はその体から手榴弾を数発と、コルト・アナコンダの銃弾を探す。血にまみれた武器を取り出し、彼の肩に手を置く。

「お借りします」

軽く一礼をする。

そして、落ちている自分の銃を拾いながら神楽を一瞥する。頭が吹き飛ばされていた。

「おまえの仇も取ってやるよ」

綾人は走り出した。秦野を殺すためにジャングルへ向かって。

決意

不意にインカムにノイズが走る。意味することは一つ。

秦野がジャングルに入った。

綾人は足を速める。途中に何人かの暗屠の姿を捉えたが、ゆつくりと構うひまがないので死角を取れた相手の頭だけを撃ちぬいていた。すでにその時点でP―88の弾丸は切れた。予備のマガジンは持ってこなかったなのでその場に銃を捨てる。

MP―5は使い物にならなかったので、持っているのはコルト・アナコンダの弾丸十数発だけということになる。

「……れか！ 誰か！ 応答しろ！」

切迫したコギトの声がインカムから流れる。

「こちら綾人。状況を伝える」

冷静に応答する。

「綾人か！ よかった。他の二人と連絡が……」

声を遮って綾人は説明する。

「キルと神楽が殺された。ラグエルとはまだ会っていない」

マイクの向こうでコギトが息を飲むのが聞こえた。次いでラグエルの声も反応した。

綾人はこれまでのことを順を追って説明していく。進む足は止めない。

「分かったわ。私もジャングルへ向かう」

答えたのはラグエルだった。そこにコギトが口を挟む。

「待ってくれ。作戦は中止にする。このままでは無理だ。それにこっちも大変なことになってるんだ。あずさが君たちを追って飛び出していった。至急保護しに行つてほしい」

「な！」

綾人は絶句した。こんな危険な場所に彼女が。焦る心を押さえて冷静に考える。自分が今なすべきことを。

「ラグエル」

綾人は呼びかけた。

「あずさを保護しに行ってくれ。俺は秦野にとどめを刺す」

これが一番ベストだ。自分は一度戦ったことがあるし、戦闘プログラムがインストールしてあるので戦闘力でラグエルに劣りはしないだろう。

距離的にも彼女のほうが近かった。

何より、彼らの仇が取りたかった。キルや神楽、そして両親の。

「一人では危険よ!」

「そうだ、綾人! 二人であずさを助けに行って撤退しろ」

二人は口々に反論する。

「キルは俺の目の前で殺された。仲間が目の前で死んだんです。俺は許せない! 全てを終わらせるために止まることはできない! 行かせてください」

固く決意を込めて言い放つ。

しばらく反応はなかった。

「わかったわ。行きなさい」

「おい! ラグエル。何を?」

コギトの狼狽した声。ラグエルは優しい口調で言った。

「大丈夫よ。綾人は電視者、コードクサカベなんだから」

「どこでそれを?」

綾人が驚いて訊ねる。

「ここにはいろんな資料があるに決まってるでしょ。いろいろ目を通したの」

「さすがですね」

「どんなときでも情報は大切よ。覚えときなさい」

「はい」

綾人は心から素直に返事をした。

「でもあそこには電波が届かないんだぞ」

反論するコギト。

「電視者になれる資質って知ってる？ 資料にあったんだけど、ずば抜けた適応力らしいわよ。だから私は綾人を信じる」

返答はなかった。

「それからコギト。あなたが暗屠だったからって私は疑わないわよ。大事な仲間だからね」

コギトの声は聞こえなかった。ただ、かすかに微笑みが聞こえた気がした。

「今からあずさの救出に向かう。コギト、案内して。それから綾人。もし死んだら許さないからね」

「O・K。」

それを言ったとき、綾人は巨大な扉の前に立っていた。

「コギト。この画面をサーチしてくれ」

目の前の扉の、その奥を凝視するように見つめる。

「近くに熱源はない」

すぐに答えは返ってきた。綾人は電子ロックを見つめて扉にコードを入力しながらラグエルに言う。

「あなたは人を守るために戦ってるんですから、あずさを守ってください」

扉が機械音を立てゆっくりと開いていく。

「生きて帰ってきてね。あなたは必要な人よ。電視者だからではなく、私たちの仲間として」

「死ぬなよ。みんな待ってるんだから」

綾人は目の前に広がるジャングルを見る。

「了解」

そして、足を踏み入れた。

ジャングル

綾人は一瞬この壮大な景色に見とれていた。まるで密林の中にいて、ここが日本だということを忘れそうだ。名前はわからないが、青々と茂った木や絡まるつたなどはテレビで見たジャングルそのものだ。

なぜこんなスペースが？　そう思ってから綾人はコギトの言葉を思い出す。

「ジャングルは我々暗屠の療養所でもあるんだ。疲れた心を癒すには自然が一番らしいからね」

皮肉なものだ。その癒すための場所で、最後の決着をつけるとは。手近な大木の後ろに隠れて辺りを見回す。このような視界の悪い場所では、最初に見つかった方が圧倒的に不利だ。下手をすれば狙われておしまいだ。

注意深く観察するが、辺りは静寂のみで物音一つない。

あいつもバカではないか。綾人はかすかに期待していた。秦野が扉を入ってくる自分を狙うことを。そうすれば外側から位置を補足できるので、逆に狙うことも可能だった。だが、その可能性は消えていた。

動くことは得策ではない。やつもこのジャングルの中で息を潜めて、自分が視界に入るのを待っているだろう。だがこのままじっとしているわけにもいかない。

危険は承知だが、綾人は動き始めた。もちろんそれなりに理由があった。MP―5をはじいたときに、奴の手の骨は折れただろう。右腕を撃たれて、その上左手が使えない今の秦野は正確に狙撃することは困難だろう。

その算段のもとに、綾人は一つの作戦を立てた。手元にある手榴弾は5個。この部屋のスペースは設計図によるときほど広くない。キルから借りたホルダーから手榴弾を取り出し、ピンを抜いて投

げた。

走りだしてもう一つを投げる。

作戦とは無造作に手榴弾を投げ込むこと。上手くいけばこれで奴をおびき出すこともできるだろう。ひょっとしたら命中することだってあるかもしれない。

次々と右左にわけながら投げ込む。爆音と木々の折れる音が後ろから聞こえる。全部投げ終わった後に再び大きな木の後ろに見を隠す。周りの警戒も怠らない。扉と反対側の壁近くまで来ていた。音に意識を集中するが木々の折れる音だけしか聞こえてこない。

どれだけ待っただろうか、まったくもって秦野が姿をあらわす気配はない。

今のでこちらの居場所は特定されたはずだ。なぜ撃ってこない。それとも撃てないのか。思考を張り巡らせて状況を分析する。

この密林にあるものは、キュアとホットライン。ようするにタンクとパソコンだ。そんなものを今使っているヒマはないはずだ。奴はどこに。まさか入れ違いで部屋の外に出たのか。

そこで見慣れないものが目に付いた。この場には不釣り合いなタンクが二基。

あれがキュアか。

そのとき、あるはずのないことが頭をよぎる。

まさか、あの中で治療をしているということとは。ありえないことだが、可能性はゼロではない。

バカな考えではあるが、試す価値はある。綾人はタンクに向かって引き金を絞る。一基目が音を立てて中央に穴をあける。中からは水が流れ出してくる。念のため二発目を撃ちこむが、タンクの穴が増えただけだ。

一応、二基目にも撃ちこもうと構えたが、この角度からは一基目が邪魔になる。素早く別の木に身を寄せる。

その時、本当にかすかだが後ろで木の折れる音がした。

あわてて振り返るが誰もいない。綾人が投げた手榴弾で折れた木

が転がっているだけだ。いくらかは爆発で火がついてくすぶっていた。煙の流れに妙な違和感を覚える。

いつか覚えた知識。どこかで見た状況。育成プログラムでは……戦闘技術の一つに思い至るのに、たいして時間はかからなかった。そしてそれが綾人の命を救った。

違和感のある地点へ向けてすぐさま銃弾を発射する。そして足音だけが、その位置から走り去っていく。

間違いない！ 綾人はあわてて全弾装填する。

システムが試験的に開発した迷彩。電磁迷彩装置をあいつが装備していることは明らかだった。それは電磁波によって光を曲げて自分の姿を透過させるものだった。人間は物体から反射してくる光を見ている。光が届かなければその姿は見えない。今の秦野は光の届かない場所にいるのだ。煙がくすぶっている状態でなかったら、綾人もそのことを思いだすには至らなかつただろう。

綾人は次の襲撃に対して耳に神経を集中させる。こうなった場合は音が頼りだ。

嫌な汗が体に粘りつく。

綾人は冷静に音に耳を傾ける。気がパチパチと燃えている。足音はしない。この場合は立てていないといったほうだ正しいだろう。

秦野の武装を予想する。教科書どおりならば、音を立てることがない武器、それでいて殺傷能力の高い、強化セラミックのブレード。切れ味はダイヤをも切断できると言われる代物。

予想が確信へと変わる。奴は近づいてくる。遠くからは攻撃してこない。

そして賭けに出る。綾人は壊れかけて中の液体が水溜りを作っているキュアへと走る。

今ここで攻撃を受ければよける余裕はない。だが、この状態では勝ち目が薄い。

賭けのスタートラインに立つ為の決死のダッシュ。

後ろで風の動きを感じた気がした。かまってはいられない。無我

夢中で水溜りの中央へと跳んだ。

水滴が飛び散る。攻撃はない。

「秦野おー！ 俺はここだ！ 360度どこからでも狙ってこい！」
銃を構える。

「どちらが生き残るか決めるぞ！ どちらがここにいてるべき存在なのか！」

目を見開き水の波紋を眺める。音を聞く。

湿った土を踏む音が聞こえたときに、すべては決まる。

心臓が高鳴る。

呼吸数が多くなる。

水面の波紋が消えて、平衡を保ち始める。

綾人は静寂に包まれる。

心拍数、呼吸数が正常へと近づく。

時が止まった気がした。しかし、静寂は破られた。

——真後ろから湿った足音！

常軌を逸しているような反射で、振り返ると同時に引き金を絞る。
なにもない空間に向かって。

同時にコルト・アナコンダの銃身が紙のように切断される。しかし銃弾は発射された。

弾が空間に吸い込まれるのが見えた。綾人の頬に痛みが走る、がそれも一瞬のことだった。水溜りに何かが倒れた。

秦野のブレードは届かなかった。銃弾の方が早かった。

綾人は撃鉄を起こす。銃身の切れた銃を不自然な水溜りに向けて撃つ。

銃身がないぶん半端でない反動に大きくのけぞる。手に鋭い痛みが走る。だが、それで決着はついた。見えない場所から大量の血が染み出てきた。

——終わった。

綾人はフラフラの体で出口へと向かう。体力よりも精神的な疲労が大きかった。でも、そんなことにかまってははいられない。あずさ

が心配だった。

一刻も早く連絡を取らなければ。あずさがどうなったのか聞かなければ。そして秦野を殺したことを伝えなければ。

巨大な扉が目に入る。生還への出口が。

数歩手前にきたときに、自動的にドアが開いた。

敵か！

しかし、すでに隠れる力も残ってはいない。ただ扉から現れるであろう人影を睨むことしかできない。

ゆっくりと開いていく。そして、二人の人物を見て綾人は微笑んだ。あずさとラグエルに。

泣きそうな顔であずさが喜ぶ。

「綾人君！」

半分泣きそうな顔で綾人に駆け寄って抱きつく。ちよつと倒れかけながらも綾人は彼女の頭をなでた。

「ただいま」

今まで生死を賭けた戦いをしていたと思えないくらい優しい声が出せた。

涙で声に詰まりながらも、「おかえり」とあずさが返す。ラグエルは微笑みながらこの様子を見守っていた。

綾人はふと思いついた。

「あずさ、教えてくれないか？　なんで俺だけ呼び捨てじゃないんだ」

あずさの頬を伝う涙を拭いながら訊く。

「綾人君は、綾人君って感じだから」

「なるほどね」

そう言いながら、あずさの頬に手を当てて唇を重ねた。

彼女の手が綾人の首に回る。長い長い静寂。ラグエルはやれやれといった表情で視線をそらす。

全てが終わったと思った。

途端ラグエルの表情が変わる。

急いで発した声は、あずさの悲鳴にかき消された。

綾人は抱いていたあずさを離して苦々しげに振り返る。

「お……まえ……」

綾人の口から血があふれる。彼の腹にセラミックブレードを突き刺した秦野は、狂気の笑みを浮かべている。

装置が壊れたため、秦野は短い周期で消えたり表れたりしていた。あずさは腰を抜かしてその場に座り込む。秦野がにやっと笑い腹からナイフを抜いた。

傷跡からおびただしい血が噴き出してくる。意識が朦朧とする。

やがて世界が暗くなり、銃声が響くのが聞こえた。

「約束を守って」

あの少年の澄んだ声が、意識の最後に語りかけた気がした。

決着

「ボクヲコロシテ」

綾人はその声で目が覚める。夢の中でも現実でもないところから聞こえた音。体に激しい痛みが走る。腹部からは大量の血が出血していた。倒れながら霞んでいる目で前方を見る。ラグエルのGC-9が発射する前に秦野のブレードに叩き落とされる。あずさは綾人の目の前で震えて泣きながらその光景を傍観していた。

「虚界の住人があ。おまえらはもういないんだ。亡霊だ。いいかげんにこの世界から消えろ」

秦野がラグエルに向かって憎悪のまなざしを向ける。ラグエルが睨み返す。

「消えるのはおまえだ。この世にシステムなどあつてはいけない。世界は自然な流れでできているの。あんたが死ぬのも自然の流れ！」
そう言って腕を垂直にかかげたと同時に、隠し持っていた銃を握る。

だめだ！ 奴には見えている。反射能力では勝てない。

綾人が思うと同時に、秦野のブレードの方が早く動いていた。ラグエルの撃った弾は秦野の動きで致命傷には至らないが、命中はした。だがそれでも秦野は切りかかっている。

反射的に後ろに飛びのくラグエル。抑える腕には大量の血が滴っている。

「そんな豆鉄砲、くらってもどうって事はない。狙うなら頭を狙え。次があればな」

まずい。この状況を変えないと。

「あずさ！」

綾人は目の前で震えているあずさに、呼びかける。

「あずさあ！」

二度目の呼びかけに彼女は体を震わせて、こちらに気づく。這い

ずりながらあずさの耳元に囁く。これしかない。

「で、でもそんな……」

弱々しく、泣きながらあずさが反論する。

「これしかない。ラグエルももうもたない。あずさに賭ける」

既にラグエルは圧倒的に不利な状況に追い込まれている。防戦一方だ。秦野の身体能力は落ちてはいるが、それでも常人以上だ。秦野だって時間の問題だろうが、奴の執念を断ち切らないとだめだ。殺らなければ、間違いなく殺られる。

「隔離世の名スナイパー。任せたぞ」

綾人は精一杯元気に笑顔を見せる。

「信じてる」

涙を拭いてあずさが頷いた。そして、あずさの肩を借りて綾人は立ち上がる。目の前の攻防は完全に秦野が押し切っていた。

「逃げる！ あずさ！」

叫び声であずさが出口へとまっしぐらに走る。秦野がラグエルに蹴りを入れて吹き飛ばす。

「せめて一人でも助けようってことか。無駄だ！」

秦野が血だらけの形相で感情剥き出しに叫ぶ。

「おまえらは死ぬだけだ！」

綾人はそれを無視してラグエルを見る。

「ラグエルも逃げる。この死にぞこないは俺が殺す」

ゆっくりと確信と自信に満ちた口調。秦野の憎悪が膨らむ。

「おまえに何ができる。立っているのだってやっただろう。死んだ振りをしていれば楽に死ねたものを。切り刻んでやるよ！」

秦野がブレードを光らせて構える。

綾人は睨む。

「やれるもんならやってみろよ」

その言葉がスイッチのように、秦野が綾人に向かいダッシュをかける。

人知を超えるスピード。

既に綾人の眼前。

ブレードを振り上げている。綾人は立ち尽くしている。

「死ねえ！」

「おまえがな」

銃声が響いた。

ブレードを上げたままの態勢で秦野が崩れ落ちる。こめかみに銃弾の跡。

綾人は出口に向かって親指を立てる。その先には、しっかりと銃を構えるあずさがいた。

自分の挑発に乗った秦野ならば、絶対にこの位置にくと確信していた。正面から切り掛かってくると。そこをあずさに狙撃させた。あずさに笑顔を見せると同時に、綾人の意識は遠のいていった。

瞬間に、あずさの叫びだけが聞こえた。

虚界領域

暗屠の兵器開発セクター。通称「浄化の家」は未曾有の混乱をきたしていた。

「増員はまだなのか？」

ここの責任者である秋山は苛立ちながら怒鳴った。全ての情報が集まるセンターの中心部に集められた警備主任たちは、いちように口を閉ざしたままだった。

増員できないためではなく、すでに増員したのだ。そのことをここで言ってしまったら、全てが終わったことになる。だから、警備主任たちは真実から目をそむけるために、少しでも自分の命を永らえているようなつもりでいる為に、何も言えない。

一人事情を知らない秋山だけが当り散らすのみだった。

「いつ来るんだ、増員は！」

秋山の怒鳴りに耐えかねた主任の一人が重々しく事実を告げる。

「増員は、されました。暗屠から成功者が二十人以上派遣されました」

「だったらこれはどういうことだ！」

各部屋のコンピューターサーバーを示すディスプレイを指差す。すでにほとんどの部屋は機能していない。つまり、破壊された。

「無理だったんです。奴には我々では敵わない」

「どうすればいいんだ！ おまえも成功者なんだろう！ 少しは考えろ！」

秋山は失神しそうな勢いで叫んだ。

「おまえも、おまえも、おまえもだ！」

主任たち一人一人を睨む。

「神楽さんや秦野さんがいない今、やつに勝てる人間はいません」その言葉は決定打だった。室内に静寂が訪れる。

秋山は苦々しく沈黙を破る。

「分かった。メインサーバーにある情報を全て外部装置に保存した後、破棄して撤退する」

苦肉の策だった。主任たちは沈痛な面持ちで頷いた。だが誰一人顔を上げることはなかった。そこで時間が止まったように。

「おい、どうし……」

その言葉が終わらないうちに、部屋の電子ロックが解除される音が響く。

これはひょっとして！ まさか、もうここまで？ 額に汗が滲む。電子音とともに扉が開く。そして、資料で穴が開くほど見た顔を発見して、凍りついた。半年前に暗屠を壊滅寸前まで追い込んだ男。秦野を倒した男。

コードクサカベこと椎名綾人を。

「無駄な抵抗をするな。しなければ殺しはしない」

秋山に抵抗できるはずがなかった。彼は研究者でしかない。

インカムに向かって綾人が何やら喋っている。

「秋山、このディスクにこの全情報を入れろ」

彼は素直に従うことにした。命が惜しかったから。

途中から女が二人綾人のもとに合流した。これも資料で知っていた顔だ。

彼女たちは手分けして秋山とは別に情報を引き出していた。

全ての作業が終わり、彼はディスクを綾人に手渡す。そして三人は引き上げていった。

三人が部屋を出ていつてからしばらくして秋山が安堵のため息を漏らしたとき、全ての所内のシステムがダウンした。もう二度と復旧はできない状態となって。

「あたしのウイルスもなかなかのもんでしょ？」

あずさが電源の全て落ちた研究所の出口で胸を張って綾人に自慢する。

確かに凄い。綾人は素直に思った。コギトのサポートをして以来

開花した彼女のコンピューターに関する才能は、めざましい進化を遂げた。いまや、隔離世の中では一番のヘヴィーユーザーになっている。こんなウイルスはコギトだって作れない。

「凄いなあー。昨日まで毎日閉じこもってこれ作ってたの？」

「うん。かまってあげられなくてごめんね」

「俺は猫かよ」

笑いながらあずさの頭をぽんと叩く。ラグエルが微笑みながらその様子を見ている。

「はいはい、いちやいちゃするのは後よ。早くコギトのバンに帰りましょ」

あずさが小学生のように元気に「はい」と答える。

秦野を倒したあと、幸いな事に、一基残されたキュアで綾人は一命を取り留めた。しかし、不幸な事にジャングルにあったシステムへのホットラインにはほとんどの情報は残っていなかった。すべてシステム側から破棄された後だった。だから、今はこうやって残っていた情報を頼りにシステムをたどるしかない。

コギトの乗っている白いバンが遠くに見える。運転席から陽気に手を振っている。

あずさは手を振り返して駆けて行く。

それぞれにできることを、一歩ずつ。彼らに焦りはない。いまは、この生活も悪くない。全員の暗黙の意見である。

「ラグエル。前俺に言ったこと覚えてる」

綾人が突然口を開いた。

「なに？」

「自分が野蠻だっけって言ったこと」

あの作戦の前夜、彼女は自分のことを蔑むように言っていた。あの時は何も言えなかったが今なら言える。

「野蠻な人間は自分のことを野蠻だっけって言わないよ」

自身満々で言い放つ。ラグエルは思わず吹き出した。

「なによそれ」

「え、だから。あなたが野蛮だったら世界中の人間は野蛮だってことだよ」

さらにラグエルは笑い出した。綾人としてはマジメに言ったつもりだが、笑ってくれるんならそれでもいいかと思えてくる。

「綾人っていいやつね。あずさがいなかったら抱きしめてキスしてあげるのに」

悪戯っぽく言う。

「遠慮しときます。彼女怒ったら怖そうだから」

「そうね。作戦中にいきなり後ろから撃たれちゃうしね」

二人で声を出して笑った。

そこにバンがやってきて、運転席からコギトが顔を出す。

「なに笑ってるんだい？ さ、早く帰ろう」

綾人は頷いた。

「そうですね、早く帰りましょう。俺たちの家に」

バンに乗り込みながらあずさに、

「明日デートに行こっか？」

と訊いてみた。

あずさは元気よく「うん」と言う。

そんな様子をコギトとラグエルが嬉しそうに疲れた表情で見っていた。

車が走り出す。浄化の家があった森を抜けて繁華街へ。

たくさんの人が流れている。車外を見ながら綾人は思う。

誰だって自分の存在意義を考えるだろう。でも、それはどうだった

ていいんだ。今自分がここにいること、誰かに覚えてもらっている

こと、それだけで十分だ。少なくとも俺はそれで満足だ。

この、虚界の領域で、俺は確かに生きている。存在している。

窓を開ける。風が心地いい。

ふとあの少年を見た気がした。慌てて探すが見つからない。

「どうしたの？」

あずさが不審に思って訊ねてくる。

「いや、なんでもないよ」

軽く返して窓を閉める。「いつかきつと、殺してあげるよ」と優しく呟きながら。

どこまでも澄んだ無機質な、「ありがとう」と言う声が聞こえた気がした。

――了――

虚界領域（後書き）

これにて『虚界領域』は、完結です。

今まで読んでいただけた方、ありがとうございます。長く皆さんの時間を使わせてしまったので、読んでよかったと思っていただけたら幸いです。

この作品はかなり前のものをリライトしました。と言っても、ほぼ手を加えていません。自分の中では、初の長編でもあり、小説賞の最終選考に残ってくれた思い出深い作品です。

とりあえず、こうやってアップできた事で、また新たな長編を作ろうという気がわいてきました。次は、新作で、といきたいのですが賞に応募するために連載は難しいかもしれません。まあ、落ちたらまた連載開始！ってそれも失礼か。

とにかく、読んでいただき、誠にありがとうございます。

感想も、頂けたら喜びます。

辛口、激辛も歓迎ですので、ぜひ皆さんのご意見をお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6838m/>

虚界領域

2010年10月8日14時24分発行